

JFA中期計画 2015 - 2022



公益財団法人 日本サッカー協会

JFAの理念

サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、
人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。

JFAのビジョン

サッカーの普及に努め、スポーツをより身近にすることで、
人々が幸せになれる環境を作り上げる。
サッカーの強化に努め、日本代表が世界で活躍することで、
人々に勇気と希望と感動を与える。
常にフェアプレーの精神を持ち、
国内の、さらには世界の人々と友好を深め、国際社会に貢献する。

JFAのバリュー

エンジョイ スポーツの楽しさと喜びを原点とすること
プレーヤーズファースト 選手にとっての最善を考えること
フェア オープンかつ誠実な姿勢で公正を貫くこと
チャレンジ 成長への高い志と情熱で挑戦を続けること
リスペクト 関わりのあるすべてを大切に思うこと



DREAM
夢があるから強くなる

日本サッカー協会(JFA)は、2005年1月に「JFA2005年宣言」を行い、2015年までに達成すべき目標を「JFAの約束2015」として掲げました。

そして今、2015年を迎えるにあたり、JFAでは、「JFAの約束2015」の総括を行うと共に、これからの日本サッカー界のより一層の成長を期し、JFAが今後の新たな8年間で特に力を入れて推進していく活動を整理し、「JFA中期計画2015-2022」として取りまとめました。

また、2015年3月には「JFA のバリュー」を策定しました。これは、私たちサッカーファミリーが大切にしていけるべき価値観として定めたもので、「JFAの理念」、「JFAのビジョン」と共に、多くのサッカーファミリーの皆さまと共有していきたいと考えています。

「JFAの理念」、「JFAのビジョン」、「JFAのバリュー」、そして「JFA中期計画2015-2022」に基づき、地域/都道府県協会など、各種加盟団体をはじめとする多くのサッカーファミリーの皆さまと今後も密に連携し、共により良い日本のサッカー界を創っていききたいと考えています。

2015年5月

公益財団法人 日本サッカー協会
会長 大仁 邦彌

1. JFA中期計画2015-2022 概要	3
2. JFAの約束2015 総括	7
3. 環境分析とJFA事業構造分析	15
4. 新たな目標と基本戦略	19
5. アクションプラン2022	25
6. 収支計画	47

1. JFA中期計画2015-2022 概要

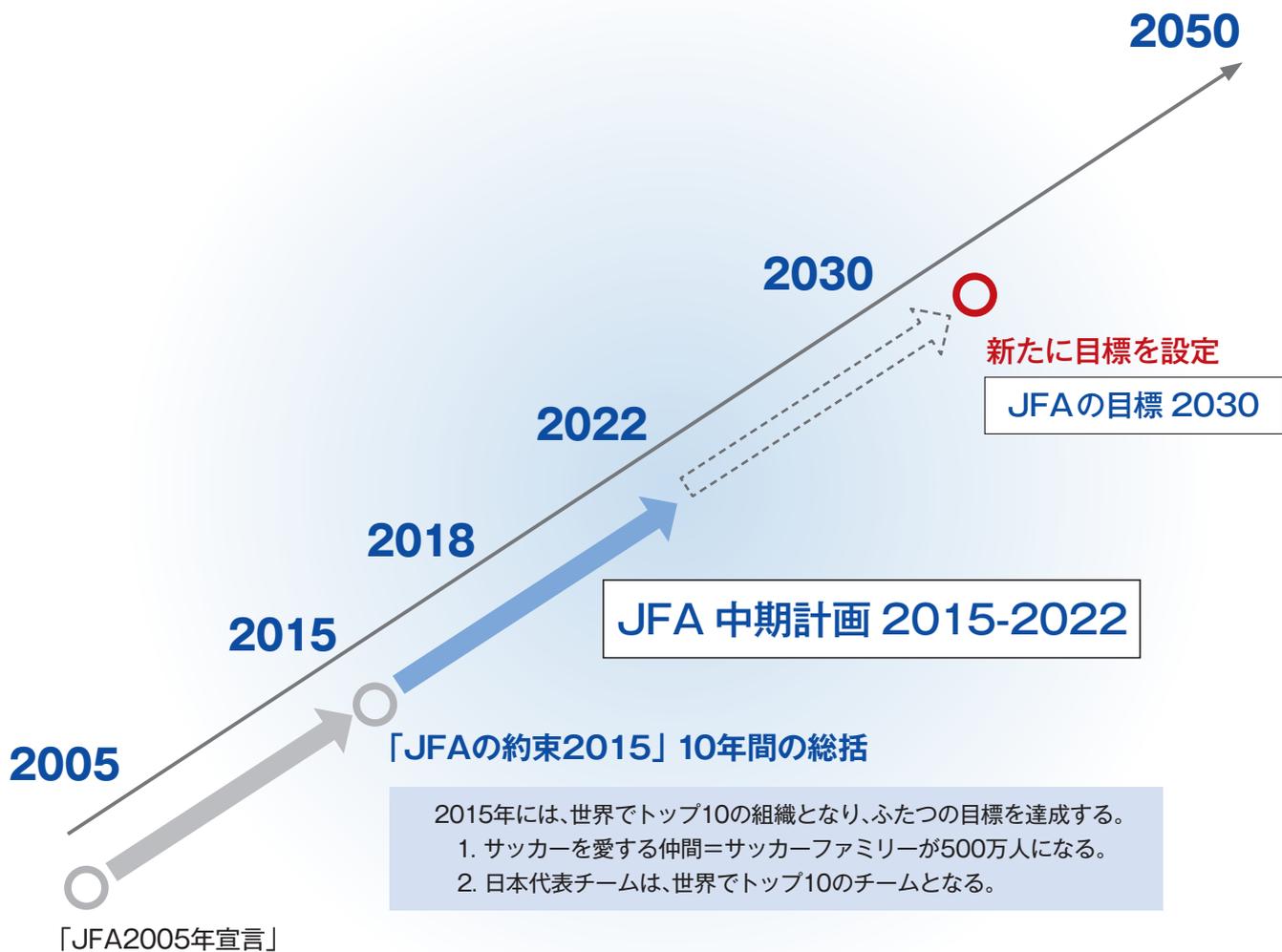
「JFA中期計画2015-2022」は、「JFA2005年宣言」で掲げた「JFAの約束2050」を実現するために、2015年から2022年までの8年間で私たちが特に力を入れて推進していく活動を整理したもので、「JFAの約束2015」の総括、2030年に向けた目標、新たに設定した「JFAミッション2015-2022」、「アクションプラン2022」、そして、8年間の収支計画で構成されています。



JFA中期計画2015-2022について

JFAは、2005年1月に行った「JFA2005年宣言」において、「JFAの約束2015」と「JFAの約束2050」という2つの中長期目標を掲げました。

2015年を迎えた今、「JFA2005年宣言」からの10年間の取り組みを総括すると共に、「JFAの約束2050」の具現に向けて、新たに「JFAの目標2030」を設定しました。その上で、2022年までの8年間で特に力を入れて推進していく活動を整理し、この「JFA中期計画2015-2022」として取りまとめました。



2005年1月1日、国立競技場で開催された第84回天皇杯全日本サッカー選手権大会決勝の試合前に、川淵三郎キャプテンが「JFA2005年宣言」を発表。

※「JFA中期計画2015-2022」は、2019年4月に計画の見直しを実施する予定です。また、次期中期計画は2023年4月に策定する予定です。

JFA 2005年宣言

JFAの理念

サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、
人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。

JFAのビジョン

サッカーの普及に努め、スポーツをより身近にすることで、
人々が幸せになれる環境を作り上げる。
サッカーの強化に努め、日本代表が世界で活躍することで、
人々に勇気と希望と感動を与える。
常にフェアプレーの精神を持ち、国内の、
さらには世界の人々と友好を深め、国際社会に貢献する。

JFAの約束2015

2015年には、世界でトップ10の組織となり、ふたつの目標を達成する。

1. サッカーを受する仲間＝サッカーファミリーが500万人になる。
2. 日本代表チームは、世界でトップ10のチームとなる。

JFAの約束2050

2050年までに、すべての人々と喜びを分かちあうために、
ふたつの目標を達成する。

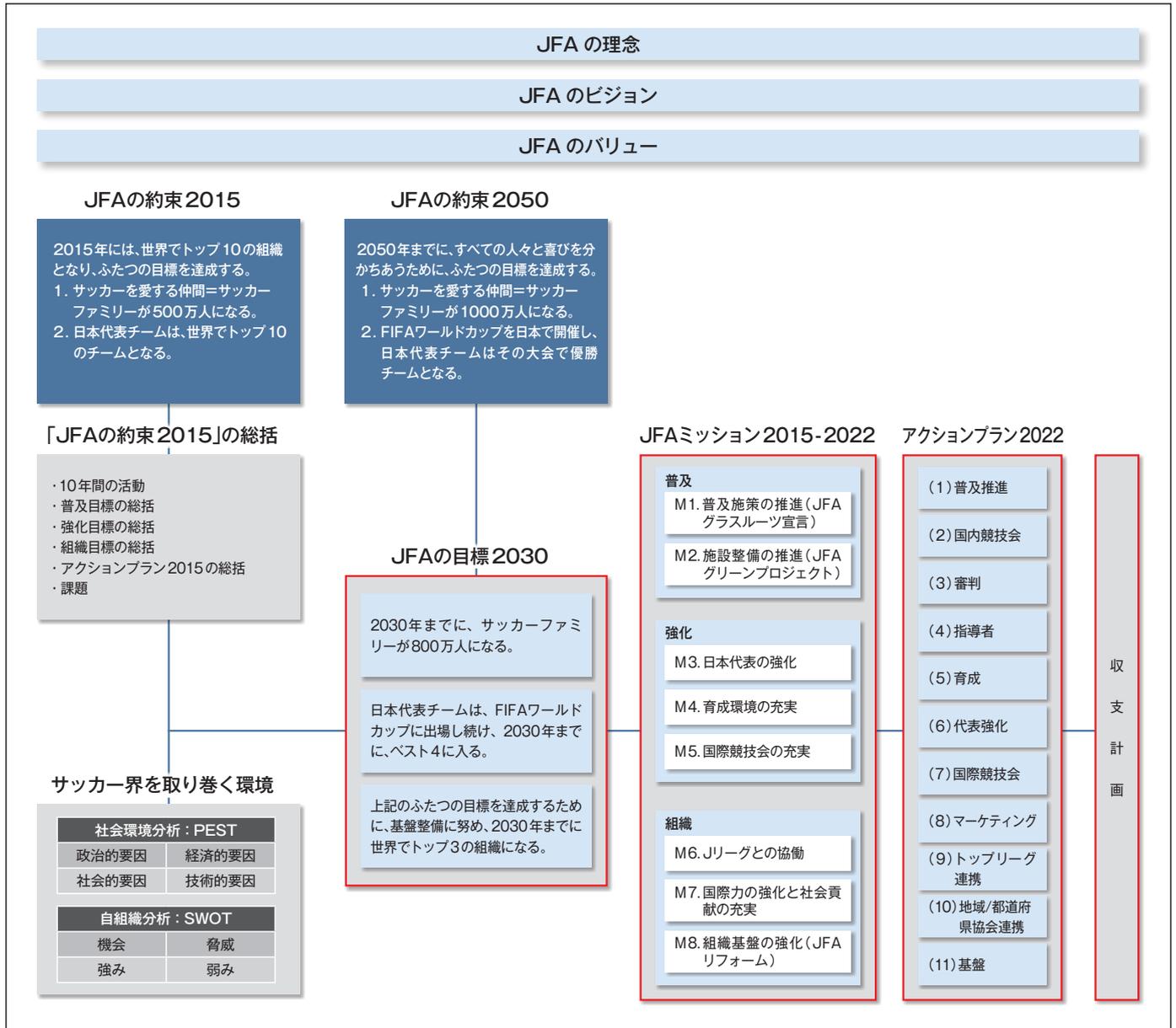
1. サッカーを受する仲間＝サッカーファミリーが1000万人になる。
2. FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームは
その大会で優勝チームとなる。

DREAM

夢があるから強くなる



[JFA中期計画2015-2022の骨子]



目標とプランの策定にあたっては、それぞれマーケティングサイクルである8年間、FIFAワールドカップサイクルである4年間に区切って整理しました。また、「JFAの約束2050」が長期のスローガンの目標であることを踏まえ、「JFAの目標2030」を策定し、2018年・2022年の普及と強化のそれぞれの目標を設定しました。そして、目標達成のための成功要因(KSF: キー・サクセス・ファクター)を整理して、8年間の重点的な事業・施策として「JFAミッション2015-2022」を策定し、その上で、8年間の具体的な目標に対して「アクションプラン2022」を策定しました。さらにJFAでは、4年ごとの具体的な業務計画を定めた「業務プラン2018」を策定し、関係者間で共有しています。

[目標とプランの考え方(期間設定について)]

	2015	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	-	50
目 標	JFAの目標2030																	
JFAミッション	JFAミッション2015-2022									JFAミッション2023-2030								
アクションプラン	アクションプラン2022									アクションプラン2030								
業務プラン	業務プラン2018			業務プラン2022			業務プラン2026			業務プラン2030								

2. JFAの約束2015 総括

JFAは、「JFA2005年宣言」で「JFAの約束2015」として中期目標を設定しました。2015年には、サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが500万人になること、そして、日本代表チームは、世界でトップ10のチームになることです。また、この2つの目標を達成するために、世界でトップ10の組織になることを目標として掲げました。ここでは、2005年からのサッカー界の歩みと共に、この「JFAの約束2015」の総括をします。

※本章に記載する内容のほかに、1) 2005年から2014年までのJFAの活動年表、2)「アクションプラン2015」総括、3) サッカーファミリー調査、4) 組織力調査に関して、より詳しいデータ等を取りまとめた別添資料があります。



多くのサッカーファミリーの皆様と共に歩んだ10年間。 日本サッカーの10年間の歩みを振り返ります。

2005年1月に「JFA2005年宣言」を行い、JFAは「JFAの約束2015」として2つの目標を掲げました。一つが、サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが500万人になること。そして、日本代表チームは、世界でトップ10になることです。2005年から2015年に向けたこの10年間で、11のプレジデント・ミッションを軸に、日本サッカー界は大きく飛躍することができました。

普及

普及施策は、都道府県協会の多くの関係者と共に、「JFAキッズプログラム」や各種フェスティバルの開催、リーグ環境の整備の推進など、この10年間JFAが力を入れてきた活動です。サッカーの登録選手数の合計は、2005年度は876,702人でしたが、2014年度には964,328人になり、10.0%の増加となりました。特に、少子高齢化が進む中でも4種(小学生年代)が11.0%、3種(中学生年代)が22.4%、2種(高校生年代)が12.3%の増加となっています。

具体的にみると、キッズプログラムは都道府県協会を中心に、幼稚園や保育園への巡回指導を全国各地へと広げてきました。2014年度には4,600カ所以上で巡回指導を実施し、1年間で延べ40万人以上の子どもたちと触れ合いました。そのほか、キッズやフットサル、レディースなどの各種フェスティバル、女子の普及に特化した「JFAなでしこひろば」なども全国各地で展開し、サッカーの楽しさを多くの人々と分かち合いました。2008年にはJFAフットボールデーとして全国でイベントを開始、今では9月前後に、47都道府県の各地でさまざまなサッカーイベントが繰り広げられています。

また、2008年に「JFAグリーンプロジェクト」を発足し、全国の園庭や校庭、地域のグラウンドの芝生化にも取り組みました。施設面では、2004年度から「FIFAワールドカップ記念事業」、2007年度からは「都道府県フットボールセンター整備助成事業」を展開し、2015年までに全国で49カ所のサッカー拠点施設を整備してきました。

そして、2014年には「JFAグラスルーツ宣言」を行い、年齢、性別、障がい、人種などに関わりなく、だれもが、いつでも、どこでも、サッカーを楽しめる環境づくりに努めることを宣言しました。

強化

2006年に愛称が決まったSAMURAI BLUE(日本代表)は2006FIFAワールドカップドイツに出場、2010FIFAワールドカップ南アフリカではベスト16に、AFCアジアカップ カタール2011では大会最多となる4度目の優勝を成し遂げ、2014FIFAワールドカップブラジルにも連続出場を果たしました。アンダーカテゴリーの代表もFIFA U-17ワールドカップ メキシコ 2011でベスト8に入り、第30回オリンピック競技大会(2012/ロンドン)ではベスト4に入りました。

2004年に愛称が決まったなでしこジャパン(日本女子代表)は、東アジア女子サッカー選手権2008決勝大会を制し、公式大会初優勝を飾りました。そして、東日本大震災が発生した2011年には、FIFA女子ワールドカップ ドイツ 2011で劇的な優勝を収め、同年、国民栄誉賞を受賞しました。2012年には、第30回オリンピック競技大会(2012/ロンドン)で準優勝を果たしています。また、女子のアンダーカテゴリーの代表は、FIFA U-20 女子ワールドカップ ジャパン 2012で3位に、FIFA U-17 女子ワールドカップ コスタリカ 2014では初優勝を果たしました。

フットサル日本代表は、AFCフットサル選手権 ウズベキスタン 2006で初優勝し、ビーチサッカー日本代表は、FIFAビーチサッカーワールドカップ リオデジャネイロ 2005に出場し、ベスト4となりました。

選手育成の面では、2008年に「『JFA2005年宣言』実現のためのロードマップ」を策定し、育成や競技会のあり方などを多くの方々と共有し、取り組んできました。

2007年には、地域ユースダイレクター /47FAユースダイレクターを設置し、全国レベルでの育成体制を整えました。指導者の養成にも力を入れて取り組み、2年に一度、フットボールカンファレンスを開催するほか、「公認A級コーチU-12養成講習会」を新設しました。登録指導者の数は、S級からD級までで2005年度に46,233人だったのが、2014年度には76,536人になり、65.5%増加しました。

また、エリート育成機関として、2006年に「JFAアカデミー福島」が開校し、2009年には2校目となる「JFAアカデミー熊本宇城」が開校しました。2010年には、日本で3カ所目のナショナルトレーニングセンターとして「堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター（J-GREEN堺）」がオープンし、その2年後、女子のエリート育成機関として「JFAアカデミー堺」が開校しました。女子のアカデミーは、2015年4月に「JFAアカデミー今治」も開校しました。

競技会の改革にも力を入れて取り組みました。2006年には、2種(高校生年代)・3種(中学生年代)のリーグ改革に着手し、2011年には、高円宮杯全日本ユース(U-18)選手権大会がリーグ方式となり、「高円宮杯U-18サッカープレミアリーグ」として再開しました。そのほか、同年、U-12年代のJFA主催試合に8人制サッカーを導入するなど、競技会の充実、リーグ文化の推進に力を入れてきました。

審判の分野では、「JFAレフェリーカレッジ」を2004年1月に開校し、2007年には「審判トレーニングセンター」をスタートさせて、若年層からの審判員の養成に努めてきました。サッカー・フットサル審判員を含めた登録審判員数は、2005年度には188,582人だったのが、2014年度には275,228人になり、45.9%増加しました。また、トップレフェリーの強化にも努め、FIFAワールドカップでは男女の日本人審判員が活躍しています。

組織

組織基盤の面では、プレジデント・ミッションを軸に、地域/都道府県協会との連携を強化し、2008年には全ての都道府県協会が法人化するに至りました。

Jリーグをはじめ、国内トップリーグにも大きな動きがありました。Jリーグは、2013年シーズンからクラブライセンス制度を導入し、2014年シーズンからはJ3がスタートしました。なでしこリーグは、2010年に「チャレンジリーグ」が発足して2部制になり、2015年からはさらになでしこリーグ1部、同2部、チャレンジリーグの3部制へと拡大しています。フットサルは、2007年にFリーグが開幕し、新たなステージに移行しました。

2007年には、「JFAこころのプロジェクト」のトライアル授業を実施し、同年4月以降、本格的にスタートしました。夢を持つことの大切さなどを伝える「夢の教室」は2008年以降、海外でも開催、2015年3月末までの実施数は6,994回、参加児童・生徒数は211,971人に上ります。

2011年に発生した東日本大震災に際しては、復興支援プロジェクトを立ち上げて、復興支援活動を行ってきました。震災直後の3月29日には、大阪長居スタジアムにて「復興支援チャリティーマッチ」を開催しました。物資の支援からサッカー教室の開催、被災沿岸地域の登録チームへのサポートなど、さまざまな支援活動を展開し、特に、被災地域の現況をきめ細やかに把握するため、専任の特任コーチを任命しました。そのほか、国際サッカー連盟(FIFA)やヨーロッパサッカー連盟(UEFA)をはじめ、キリングroup、アディダス ジャパン株式会社、そのほか多くのサッカーファミリーの皆さまから多大なる支援をいただき、フットボールセンターの整備やJクラブのホームスタジアム、練習場の改修など、被災地域のサッカー施設の復旧に尽力しました。

FIFA主催大会などの国際競技会の開催・運営にも積極的に取り組んできました。FIFAクラブワールドカップは2005年、2006年、2007年、2008年の4大会と、震災後の2011年と2012年の2大会の計6大会を日本で開催しています。2012年にはFIFA U-20女子ワールドカップも日本で開催しました。また、アジア貢献事業として指導者の海外派遣を実施したほか、フランス、スペイン、ドイツの各国連盟とパートナーシップ協定を締結し、近年ではヨルダン、ベトナム、イラン、インドなどともパートナーシップ協定を締結しました。

さらに、「リスペクトプロジェクト」や「環境プロジェクト」などの社会貢献活動も積極的に行い、また、スポーツ組織のマネジメントを学ぶ「JFAスポーツマネジャーズカレッジ」を展開し、協会組織やクラブマネジメントの強化にも取り組みました。

2014年からは、「JFAリフォーム」と称し、JFAの組織の強化に着手しています。2015年3月には、FIFAの標準規約「FIFA Standard Statutes」に準拠してJFA規約を変更しました。これによって、より透明性を高め、より多くのステークホルダーが参加できる組織になり、JFAの司法機関である規律委員会、裁定委員会、不服申立委員会も完全に独立したものとなりました。また、近年、指導現場における暴力問題や八百長問題、さらに人種差別など深刻な問題も発生しており、ガバナンスやコンプライアンスの徹底にも取り組んできました。

JFAの約束2015

サッカーを愛する仲間=サッカーファミリーが500万人になる。 **達成**

サッカーファミリーは、2015年、526万人になりました。

サッカーを愛する仲間=サッカーファミリーは、2015年現在、目標で掲げた500万人を上回り、5,262,220人となりました(一部、カテゴリ間での重複あり)。「JFAキッズプログラム」や各種フェスティバルの実施、施設整備やリーグ環境の整備など、都道府県協会を中心とした多くの関係者のご尽力により、サッカーファミリーが拡大しました。

[2015年 サッカーファミリー数]

項目	人数(人)	区分計	備考
■選手(目標値:3,000,000)			
1 登録者	サッカー	964,328	2014年度
2	フットサル	44,057	2014年度
3	J-futsal	21,114	2015年3月末
4 未登録者	登録チーム内未登録選手	331,918	サッカーファミリー調査より
5	市区町村未登録	247,740	サッカーファミリー調査より
6	フットサル(エンジョイ志向)	748,311	サッカーファミリー調査より
7 JFA主催イベント	フットボールデー	22,264	2014年度
8 参加者	各種フェスティバル	102,539	2014年度
9	キッズプログラム	221,392	2014年度推計値
10	JFA・キリスマイルフィールド	94,840	2011年度からの実績
		2,798,503	
■指導者(目標値:150,000)			
11 登録者	登録者	76,536	2014年度
12	キッズリーダー任意登録者	972	2014年度
13	監督数	12,411	2014年度
14 未登録	キッズリーダー(受講者数)	9,056	2013年度からの実績
15	コーチングスタッフ	51,238	サッカーファミリー調査より
		150,213	
■審判(目標値:300,000)			
16 登録者	サッカー	250,902	2014年度
17	フットサル	24,326	2014年度
18	サッカーインストラクター	2,324	2014年度
19	フットサルインストラクター	476	2014年度
		278,028	
■運営スタッフ(目標値:50,000)			
20 協会役職員	JFA	182	2015年3月末
21	地域/都道府県協会	1,847	2015年2月
22	地区/市区町村協会	13,058	サッカーファミリー調査より
23 クラブスタッフ	J/JFL/なでしこ/Fリーグ	4,456	2015年2月
24 ボランティア	J/JFL/なでしこ/Fリーグ	14,553	2015年2月
25	都道府県協会	2,721	2015年2月
26	登録チームスタッフ	15,755	サッカーファミリー調査より
27 SMC修了生		2,181	2015年3月末
		54,753	
■サポーター(目標値:1,500,000)			
28 チケットJFA会員		504,849	2015年3月末
29 日本サッカー後援会		6,310	2014年度
30 クラブサポーター	J/JFL/なでしこ/Fリーグ	690,452	2015年2月
31 登録チーム	18歳以下選手サポーター	779,112	2014年度
合計		5,262,220	

[その他の参考数値]

項目	人数(人)	区分計	備考
1 JFAこころのプロジェクト「夢の教室」参加児童	211,971		2007年からの実績
2 リスペクトFC加盟者	7,905	219,876	2015年3月末

1. サッカーファミリー数カウントの基本的な考え方

JFAが考える「サッカーファミリー」には、選手や指導者、審判員はもちろん、運営スタッフ、日本代表やJリーグの試合などをテレビやスタジアムで観戦するファン・サポーターも含まれる。例えば、2013年6月4日に開催されたFIFAワールドカップ・アジア最終予選SAMURAI BLUE対オーストラリア代表(会場:埼玉)戦では、関東地区の平均世帯視聴率は38.6%で、推計700万世帯以上がテレビ観戦していた計算になるが、こうした層も含まれている。一方、「JFA2005年宣言」で目標として掲げた「サッカーファミリー」については、特にJFAとの関わりが強い方々を、JFAが普及施策を展開していく上での施策評価指標とし、カウント対象のサッカーファミリーとして定めている(下記)。

2. カウント対象としたサッカーファミリー

大きく分けて1)選手、2)指導者、3)審判、4)運営スタッフ、5)ファン・サポーターの5カテゴリから構成される。「JFA2005年宣言」で掲げた「JFAの約束2015」では、このカウント対象のサッカーファミリーが500万人になることを目標とした。基本的には、各カテゴリで重複することなく、1人1カウントとすべきだったが、現段階ではそのような実数を把握する登録システムがなく、重複カウントを排除する高精度の調査も行えなかったため、カテゴリ間および一部カテゴリ内での重複が少なからず含まれている。例えば、選手でありながら指導者や審判員としても登録して活動している人は、今回のサッカーファミリー数では3人として計算されている。将来的には、新たな登録システムの導入等により正確なサッカーファミリーの実数が算出できるようになる見込みで、JFAとしては今後の課題と考えている。

3. 各カテゴリのカウント対象と調査方法等

[選手]

- 登録者: サッカー、フットサルの登録選手に加え、2014年度から導入された「J-futsal」(フットサルエンジョイ層のための登録制度)のメンバー数の合計値。
- 未登録者: 全てJFAが2013年~2015年に独自調査による推計値。2種・3種・4種の全登録チームのほか、全国の市区町村協会および全国のフットサル施設を対象に調査を実施。調査による推計値では、JFA登録者を除いた数字を割り出している。
- JFA主催イベント参加者: JFAおよび都道府県協会が実施する主催イベントの参加者数。「JFAキッズプログラム」の参加者については、複数回参加している児童もいることから、実参加者数を推計値として算出。

[指導者]

- 登録者: S級からD級の公認指導者ライセンスの保持者、およびキッズリーダー、ライセンス保持者以外の登録チームの監督数。
- 未登録者: キッズリーダー(受講者数)は、2013年度からのキッズリーダーインストラクター講習会の受講者数。コーチングスタッフは、2種・3種・4種の登録チームでライセンスを持たずにコーチとして携わる指導者を、独自の調査により推計。ただし、キッズリーダー(受講者数)は一部、ライセンス保持者との重複カウントが含まれる。

[審判員]

- サッカー、フットサルの有資格審判員、審判インストラクターの合算値。ただし、サッカーとフットサル両方のライセンスを持つ場合は2人として重複カウント。

[運営スタッフ]

- 協会役職員: JFAおよび地域/都道府県協会、地区/市区町村協会の役職員を独自で調査し、算出。
- クラブスタッフは、いずれもクラブへの調査により、実数を把握。
- ボランティアは、J/JFL/なでしこ/Fの各リーグの加盟クラブや都道府県協会に所属するボランティアを調査により把握。
- 登録チームスタッフは、2種・3種・4種の登録チームへの調査により、推計値として算出。
- SMC修了生は、JFAスポーツマネージャースカレッジの本講座およびサテライト講座の2004年度からの受講者数の総数。ただし、一部、協会役職員やクラブスタッフ等との重複カウントが含まれる。

[ファン・サポーター]

- チケットJFA会員は、2015年3月末段階の会員数。
- 日本サッカー後援会は、2015年3月末段階の会員数。
- クラブサポーターは、2014年シーズンの各クラブの正式ファンクラブ・サポータークラブの会員数にシーズンチケット購入者等を合算した数値。
- 18歳以下選手サポーターは、2種・3種・4種:女子の各カテゴリの登録選手の保護者をサポーターとしてカウント。登録選手1人に対して1名のサポーターとしてカウント。

※JFAでは、一般的に、サッカー好きを「ファン」、熱狂的なサッカーファンや特定のクラブチームを支持している人を「サポーター」と呼んでいる。今回、カウント対象とするサッカーファミリーについては、特にJFAとのつながりの強い人々を対象とするため、以降このカテゴリは「サポーター」と呼ぶ。
※表の中の年度は4月~3月とする。

[選手・指導者・審判の登録者数10年間推移]

選手

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	対2005年差異	対2005年
	-	対前年度増加率	年平均増加率	増加率								
第1種	181,620	180,693	178,566	175,947	172,700	167,885	160,396	160,224	156,730	154,876	-26,744	-14.7%
	-	-0.51%	-1.18%	-1.47%	-1.85%	-2.79%	-4.46%	-0.11%	-2.18%	-1.18%	-1.82%	
第2種	154,845	153,058	151,848	153,047	154,559	156,893	160,395	164,958	167,369	173,843	18,998	12.3%
	-	-1.15%	-0.79%	0.79%	0.99%	1.51%	2.23%	2.84%	1.46%	3.87%	0.99%	
第3種	219,343	223,522	235,089	236,514	237,964	238,713	252,504	260,928	267,049	268,518	49,175	22.4%
	-	1.91%	5.17%	0.61%	0.61%	0.31%	5.78%	3.34%	2.35%	0.55%	2.51%	
第4種	283,995	285,841	283,719	282,154	280,380	292,934	307,361	317,206	318,548	315,178	31,183	11.0%
	-	0.65%	-0.74%	-0.55%	-0.63%	4.48%	4.93%	3.20%	0.42%	-1.06%	1.47%	
シニア	12,166	13,221	15,185	16,555	18,045	19,177	20,778	21,900	23,401	24,935	12,769	105.0%
	-	8.67%	14.86%	9.02%	9.00%	6.27%	8.35%	5.40%	6.85%	6.56%	8.55%	
女子	24,733	25,545	25,297	25,071	25,268	25,278	26,237	28,524	30,243	26,978	2,245	9.1%
	-	3.28%	-0.97%	-0.89%	0.79%	0.04%	3.79%	8.72%	6.03%	-10.80%	2.60%	
(サッカー計)	876,702	881,880	889,704	889,288	888,916	900,880	927,671	953,740	963,340	964,328	87,626	10.0%
	-	0.59%	0.89%	-0.05%	-0.04%	1.35%	2.97%	2.81%	1.01%	0.10%	1.19%	
フットサル	120,472	124,102	127,205	125,857	123,968	125,608	124,436	125,436	127,936	44,057	-76,415	-63.4%
	-	3.01%	2.50%	-1.06%	-1.50%	1.32%	-0.93%	0.80%	1.99%	-65.56%	-6.60%	
合計	997,174	1,005,982	1,016,909	1,015,145	1,012,884	1,026,488	1,052,107	1,079,176	1,091,276	1,008,385	11,211	1.1%
	-	0.88%	1.09%	-0.17%	-0.22%	1.34%	2.50%	2.57%	1.12%	-7.60%	1.14%	

※フットサルは2014年度から個人登録からチーム/選手登録となり登録選手数が減少。また、女子は2014年度から4種年代が女子登録から4種登録へ移行のため減少。

チーム

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	対2005年差異	対2005年
	-	対前年度増加率	年平均増加率	増加率								
第1種	7,815	7,675	7,531	7,352	7,206	6,946	6,487	6,378	6,133	5,942	-1,873	-24.0%
	-	-1.79%	-1.88%	-2.38%	-1.99%	-3.61%	-6.61%	-1.68%	-3.84%	-3.11%	-2.99%	
第2種	4,379	4,351	4,266	4,207	4,178	4,151	4,143	4,149	4,140	4,126	-253	-5.8%
	-	-0.64%	-1.95%	-1.38%	-0.69%	-0.65%	-0.19%	0.14%	-0.22%	-0.34%	-0.66%	
第3種	6,872	6,927	7,078	7,142	7,154	7,142	7,185	7,207	7,359	7,463	591	8.6%
	-	0.80%	2.18%	0.90%	0.17%	-0.17%	0.60%	0.31%	2.11%	1.41%	0.92%	
第4種	8,452	8,519	8,520	8,444	8,367	8,399	8,440	8,568	8,668	8,934	482	5.7%
	-	0.79%	0.01%	-0.89%	-0.91%	0.38%	0.49%	1.52%	1.17%	3.07%	0.62%	
シニア	479	502	578	624	689	724	764	790	824	869	390	81.4%
	-	4.80%	15.14%	7.96%	10.42%	5.08%	5.52%	3.40%	4.30%	5.46%	6.90%	
女子	1,135	1,187	1,221	1,221	1,224	1,226	1,267	1,337	1,409	1,216	81	7.1%
	-	4.58%	2.86%	0.00%	0.25%	0.16%	3.34%	5.52%	5.39%	-13.70%	0.93%	
フットサル	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2,791	-	-
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
合計	29,132	29,161	29,194	28,990	28,818	28,588	28,286	28,429	28,533	28,550	-582	-2.0%
	-	0.10%	0.11%	-0.70%	-0.59%	-0.80%	-1.06%	0.51%	0.37%	0.06%	-0.22%	

※フットサルは2014年度から個人登録からチーム/選手登録となり、チーム数が計上されている。また、女子は2014年度から4種年代が女子登録から4種登録へ移行のため減少。合計値はフットサルを除く数値を示す。

指導者

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	対2005年差異	対2005年
	-	対前年度増加率	年平均増加率	増加率								
S級	210	233	257	280	302	322	348	366	387	411	201	95.7%
	-	10.95%	10.30%	8.95%	7.86%	6.62%	8.07%	5.17%	5.74%	6.20%	7.96%	
A級	684	746	819	867	928	1,033	1,120	1,173	1,258	1,363	679	99.3%
	-	9.06%	9.79%	5.86%	7.04%	11.31%	8.42%	4.73%	7.25%	8.35%	7.93%	
B級	1,656	1,913	2,160	2,388	2,648	2,977	3,278	3,476	3,745	4,006	2,350	141.9%
	-	15.52%	12.91%	10.56%	10.89%	12.42%	10.11%	6.04%	7.74%	6.97%	10.77%	
C級	21,262	23,672	25,871	25,124	25,717	26,785	27,522	27,514	28,058	28,701	7,439	35.0%
	-	11.33%	9.29%	-2.89%	2.36%	4.15%	2.75%	-0.03%	1.98%	2.27%	3.62%	
D級	22,421	25,689	28,672	30,044	31,696	33,272	35,215	38,156	40,107	42,055	19,634	87.6%
	-	14.58%	11.61%	4.79%	5.50%	4.97%	5.84%	8.35%	5.11%	4.86%	7.59%	
合計	46,233	52,253	57,779	58,703	61,291	64,389	67,483	70,685	73,555	76,536	30,303	65.5%
	-	13.02%	10.58%	1.60%	4.41%	5.05%	4.81%	4.74%	4.06%	4.05%	6.03%	

審判

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	対2005年差異	対2005年	
	-	対前年度増加率	年平均増加率	増加率									
サッカー審判員	1級	127	128	134	141	154	162	173	176	184	185	58	45.7%
		-	0.79%	4.69%	5.22%	9.22%	5.19%	6.79%	1.73%	4.55%	0.54%	4.77%	
	女子1級	23	25	29	32	33	34	34	38	38	41	18	78.3%
		-	8.70%	16.00%	10.34%	3.13%	3.03%	0.00%	11.76%	0.00%	7.89%	6.62%	
	2級	3,270	3,171	3,124	3,136	3,164	3,212	3,287	3,321	3,339	3,400	130	4.0%
		-	-3.03%	-1.48%	0.38%	0.89%	1.52%	2.33%	1.03%	0.54%	1.83%	0.27%	
	3級	28,295	28,647	28,869	29,312	30,117	30,829	31,439	32,190	33,064	33,453	5,158	18.2%
	-	1.24%	0.77%	1.53%	2.75%	2.36%	1.98%	2.39%	2.72%	1.18%	1.97%		
4級	141,072	155,112	160,051	167,181	170,259	175,376	185,526	198,312	210,044	213,823	72,751	51.6%	
	-	9.95%	3.18%	4.45%	1.84%	3.01%	5.79%	6.89%	5.92%	1.80%	5.13%		
小計	172,787	187,083	192,207	199,802	203,727	209,613	220,459	234,037	246,669	250,902	78,115	45.2%	
	-	8.27%	2.74%	3.95%	1.96%	2.89%	5.17%	6.16%	5.40%	1.72%	4.57%		
フットサル審判員	1級	44	40	49	37	35	37	38	43	43	51	7	15.9%
		-	-9.09%	22.50%	-24.49%	-5.41%	5.71%	2.70%	13.16%	0.00%	18.60%	0.64%	
	2級	886	949	907	902	903	897	885	883	880	894	8	0.9%
		-	7.11%	-4.43%	-0.55%	0.11%	-0.66%	-1.34%	-0.23%	-0.34%	1.59%	-0.04%	
	3級	3,401	3,525	3,577	3,628	3,732	3,742	3,827	3,873	3,849	3,822	421	12.4%
		-	3.65%	1.48%	1.43%	2.87%	0.27%	2.27%	1.20%	-0.62%	-0.70%	1.57%	
4級	11,464	14,433	16,617	17,634	18,685	18,858	19,126	19,440	19,553	19,559	8,095	70.6%	
	-	25.90%	15.13%	6.12%	5.96%	0.93%	1.42%	1.64%	2.64%	-1.97%	7.47%		
小計	15,795	18,947	21,150	22,201	23,355	23,534	23,876	24,239	24,725	24,326	8,531	54.0%	
	-	19.96%	11.63%	4.97%	5.20%	0.77%	1.45%	1.52%	2.01%	-1.61%	5.94%		
合計	188,582	206,030	213,357	222,003	227,082	233,147	244,335	258,276	271,394	275,228	86,646	45.9%	
	-	9.25%	3.56%	4.05%	2.29%	2.67%	4.80%	5.71%	5.08%	1.41%	4.68%		

JFAの約束2015

日本代表チームは、世界でトップ10のチームとなる。 **未達成**

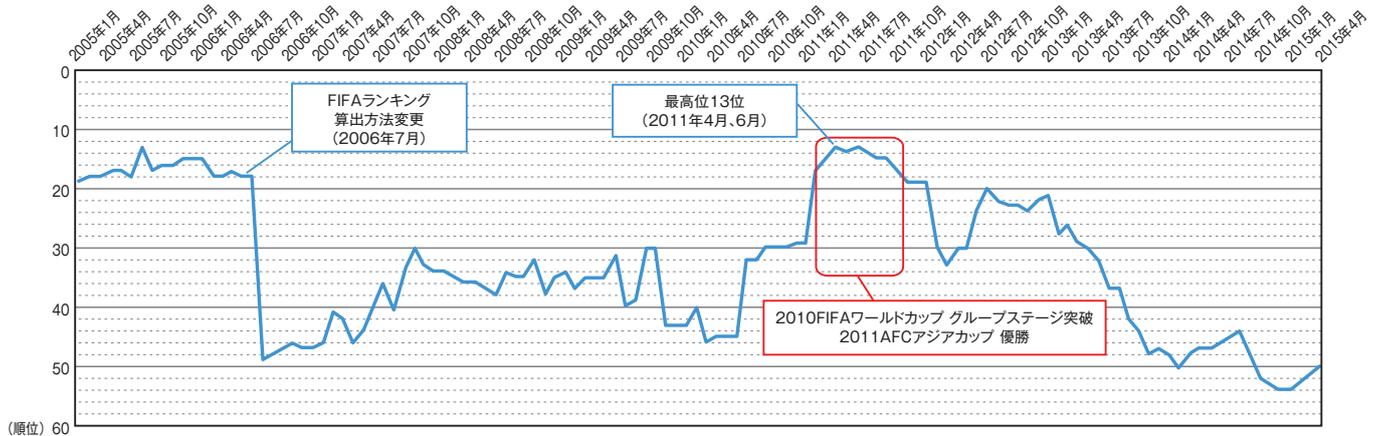
SAMURAI BLUEの世界への挑戦は道半ば。
2015年の目標は、達成できず。

世界の頂点へと続く、SAMURAI BLUEの挑戦は道半ばにあります。「世界のトップ10のチームになる」という私たちの約束は、果たせませんでした。

SAMURAI BLUE FIFAランキング50位

※2015年4月現在

SAMURAI BLUE FIFAランキング推移(2005-2015)



[各カテゴリー日本代表の成績]

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
SAMURAI BLUE FIFAワールドカップ		ドイツ グループステージ 敗退				南アフリカ ラウンド16				ブラジル グループステージ 敗退	
SAMURAI BLUE FIFAコンフェデレーションズカップ	ドイツ グループステージ 敗退								ブラジル グループステージ 敗退		
U-23日本代表 オリンピック競技大会				北京 グループステージ 敗退				ロンドン 4位			
U-20日本代表 FIFA U-20ワールドカップ	オランダ ラウンド16		カナダ ラウンド16		エジプト 予選敗退		コロンビア 予選敗退		トルコ 予選敗退		ニュージーランド 予選敗退
U-17日本代表 FIFA U-17ワールドカップ	ペルー 予選敗退		韓国 グループステージ 敗退		ナイジェリア グループステージ 敗退		メキシコ ベスト8		UAE ラウンド16		チリ 予選敗退
なでしこジャパン FIFA女子ワールドカップ			中国 グループステージ 敗退				ドイツ 優勝				カナダ
なでしこジャパン オリンピック競技大会				北京 4位				ロンドン 準優勝			
U-20日本女子代表 FIFA U-20女子ワールドカップ		ロシア 予選敗退		チリ ベスト8		ドイツ グループステージ 敗退		日本 3位		カナダ 予選敗退	
U-17日本女子代表 FIFA U-17女子ワールドカップ				ニュージーランド ベスト8		トリニダード・ トバゴ 準優勝		アゼルバイジャン ベスト8		コスタリカ 優勝	
フットサル日本代表 FIFAフットサルワールドカップ				ブラジル 1次ラウンド 敗退				タイ ラウンド16			
ビーチサッカー日本代表 FIFAビーチサッカーワールドカップ	リオデジャネイロ 4位	リオデジャネイロ ベスト8	リオデジャネイロ グループステージ 敗退	マルセイユ グループステージ 敗退	ドバイ ベスト8		イタリア グループステージ 敗退		タヒチ ベスト8		ポルトガル

※上段：開催地、下段：日本の成績

2011年、FIFA女子ワールドカップドイツ 2011でのなでしこジャパンの優勝。
そして、国民栄誉賞の受賞。
東日本大震災後、なでしこジャパンの勇姿は多くの人々に感動と希望を与えました。

なでしこジャパン FIFAランキング[女子]4位

※2015年4月現在

JFAの約束2015

2015年には、世界でトップ10の組織となる。 達成

「JFAの約束2015」では「世界でトップ10の組織となる」ことを目標としました。その総括として、世界のサッカー協会との比較によるJFA組織の現状を把握するため、JFAは、諸外国のサッカー協会について、1)人材、2)普及・登録人口、3)施設、4)競技会、5)競技力、6)財政基盤・マーケティング、7)国内機構、8)国際力の8つの観点で情報収集を行いました。

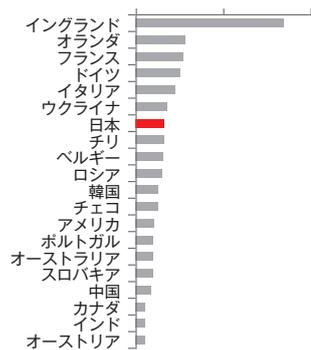
「組織力」を単純比較するのは難しいですが、全体的に見ると、下記の通り、JFAは10位以内に入っているものと考えられます。また、総合的には、ドイツやイングランドが上位に位置していることが分かります。

【世界のサッカー協会とJFA】

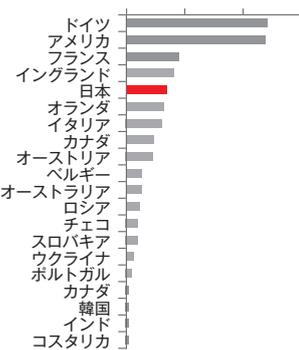
順位	人材	普及・登録人口		施設		競技会	競技力	財政基盤・マーケティング	国内機構	国際力
	協会職員数	登録人口 ※1	人口比	スタジアム数 ※2	人口比	国内リーグ観客数 ※3	FIFA大会成績 ※4	協会収支規模	国内機構ガバナンス ※5	国際機構人材輩出数 ※6
1位	イングランド	ドイツ	オランダ	アメリカ	オーストラリア	ドイツ	ブラジル	イングランド	イングランド(同率1位)	ドイツ
2位	オランダ	アメリカ	ドイツ	ドイツ	ドイツ	イングランド	ドイツ	イタリア	ドイツ(同率1位)	スロバキア
3位	フランス	フランス	チェコ	中国	韓国	スペイン	アルゼンチン	ドイツ	イタリア(同率1位)	イタリア
4位	ドイツ	イングランド	フランス	日本	イングランド	メキシコ	アメリカ	日本	アメリカ(同率1位)	アメリカ
5位	イタリア	日本	イングランド	オーストラリア	フランス	イタリア	スペイン	オランダ	オーストラリア(同率1位)	フランス
6位	ウクライナ	オランダ	オーストラリア	イングランド	アメリカ	フランス	フランス	オーストラリア	チェコ(同率1位)	ウクライナ
7位	日本	イタリア	韓国	日本	オランダ	メキシコ	アルゼンチン	アルゼンチン	アルゼンチン(同率1位)	カナダ
8位	チリ	カナダ	アメリカ	フランス	オランダ	アメリカ	日本	韓国	スロバキア(同率1位)	韓国
9位	ベルギー	オーストラリア	日本	イタリア	イタリア	中国	イタリア	ロシア	オーストラリア(同率1位)	メキシコ
10位	ロシア	ベルギー	ベルギー	ロシア	チェコ	アルゼンチン	オランダ	アメリカ	チリ(同率1位)	イングランド(同率10位)
11位	韓国	オーストラリア	ロシア	コロンビア	ロシア	日本	ウルグアイ	ベルギー	日本(同率1位)	ロシア(同率10位)
12位	チェコ	ロシア	カナダ	ポルトガル	ポルトガル	ブラジル	ポルトガル	ポルトガル	ベルギー(同率2位)	ポルトガル
13位	アメリカ	チェコ	ポルトガル	ウクライナ	チリ	コスタリカ	韓国	中国	カナダ(同率2位)	オーストラリア(同率13位)
14位	ポルトガル	スロバキア	韓国	チリ	中国	オーストラリア	イングランド	チェコ	中国(同率2位)	オーストラリア(同率13位)
15位	オーストラリア	ウクライナ	オーストラリア	オランダ(同率15位)	コロンビア	ロシア	ロシア	チリ	コスタリカ(同率2位)	中国
16位	スロバキア	ポルトガル	スロバキア	カナダ(同率15位)	ウクライナ	ウクライナ	スイス	コロンビア	コロンビア(同率2位)	コスタリカ(同率16位)
17位	中国	カナダ	ウクライナ	インド	カナダ	ポルトガル	コスタリカ	カナダ	オランダ(同率2位)	インド(同率16位)
18位	カナダ	韓国	チリ	オーストラリア	インド	コロンビア	オーストラリア	スロバキア	韓国(同率2位)	日本(同率16位)
19位	インド	インド	中国	コスタリカ	オーストラリア	韓国	チリ	ウクライナ	ポルトガル(同率2位)	ベルギー(同率19位)
20位	オーストラリア	コスタリカ	コスタリカ	チェコ	コスタリカ	チェコ	カナダ	インド	ロシア(同率2位)	アルゼンチン(同率19位)

※1 選手、指導者、審判登録者数の合計によるランキング
 ※2 各国における15,000人以上収容のスタジアム数によるランキング
 ※3 各国トップリーグの1試合あたり平均観客数によるランキング
 ※4 アンダー・カテゴリーも含む各カテゴリー代表のFIFA大会およびオリンピック競技大会の成績に、独自にポイントを定め、成績に応じて加点したランキング
 ※5 地域FAカバ、地域FA法人化、FIFA標準規約準拠の有無によるランキング
 ※6 FIFA理事会・委員会・事務局等、大陸連盟理事会・委員会・事務局等への輩出数の合計によるランキング

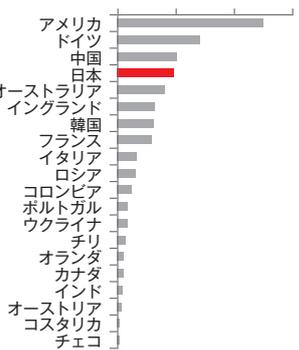
【人材】協会職員数



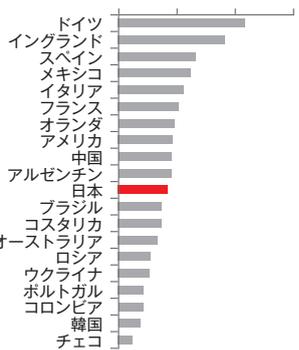
【普及・登録人口】登録人口



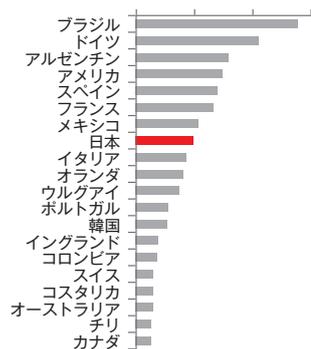
【施設】スタジアム数



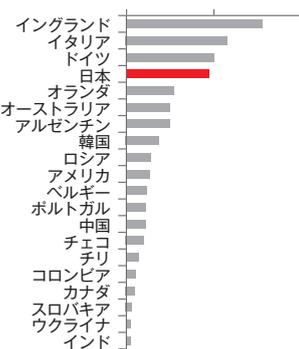
【競技会】国内リーグ観客数



【競技力】FIFA大会成績



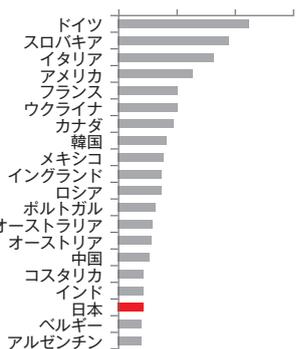
【財政・マーケティング】協会収支規模



【国内機構】国内機構・ガバナンス



【国際力】国際機構人材輩出数



(注)ランキングの算出に用いた数値等は、各国サッカー協会へのアンケート結果を集計したもの(非公表のデータも含まれるため、具体的数値は掲載しない)

10年間でJFAが成し遂げられなかったこと。 そして、今、抱える課題。

「JFA2005年宣言」に基づき、JFAはこの10年間、普及・強化・組織基盤の整備など、都道府県協会をはじめとする多くの方々と日本サッカー界の発展に取り組んできました。今回、「JFAの約束2015」で掲げた強化目標は達成できず、世界の頂点へと続くSAMURAI BLUEの挑戦は道半ばにあります。技術委員会では、FIFAワールドカップをはじめ、各試合における日本代表のピッチ上の課題を分析し、「日本代表 ピッチ上の課題」としてまとめました(下記参照)。こうした課題を解決するためには、日本代表だけにとどまらず、ユース年代からこれらの課題を共有し、育成に取り組む必要があります。さらには、子どもたちの日常のサッカー環境のより一層のレベルアップなど、解決していくべき課題は少なくありません。

なお、JFAでは、「JFA2005年宣言」と同時に、「アクションプラン2015」(下記抜粋)を策定していました。これは「JFAの約束2015」の具現に向けてJFAが遂行していくべきことを計画したものです。2015年を迎える今、あらためてこれらのアクションプランに関して、JFAができたこと、できなかったことを真摯に総括し、次の中期計画につなげます。

【アクションプラン2015(抜粋)】

1. サッカーを愛する仲間＝

サッカーファミリーが500万人になるために・・・

1) サッカーファミリーの拡大

- ①選手(チーム/選手・キッズ・フットサル): 300万人
- ②指導者: 15万人
- ③審判員: 30万人
- ④運営スタッフ、協会役員: 5万人
- ⑤ファン: 150万人

2) 「JFAメンバーシップ制度」の充実

- ①より多くのメリットの提供
- ②制度の確立

2. 日本代表チームが世界でトップ10のチームとなるために・・・

1) 代表チームの強化

- ①クラブとの連携強化と国内リーグの世界レベルへの発展
- ②チーム/選手環境の向上
- ③最適なチームスタッフの編成

2) 選手の育成

- ①指導体制の充実とユース育成/エリート養成システムの確立
- ②競技会と育成環境の充実

3) 指導者の養成

- ①世界レベルの指導者の養成
- ②ユース育成/エリート養成に関わる指導者の充実

3. 世界でトップ10の組織となるために・・・

1) 総合力の強化

- ①国際力の強化
- ②情報の活用
- ③マーケティングの効果的な実施
- ④管理体制の充実
- ⑤プレジデント・ミッションの遂行

2) 基盤の確立

- ①組織・人材の充実
- ②施設の確保・増加
- ③財務基盤の確立

【アクションプラン2015総括と日本サッカー界の課題】

●普及面に関しては、合計値では500万人を超えたものの、「選手」および「審判」の категорияにおいて、設定した目標を達成できませんでした。また、「JFAメンバーシップ制度」の充実についても、10年間検討を進めたものの、未登録者をも含めた新たな制度づくりには至りませんでした。そのほか、普及面で残った主な課題は下記の通りです。

- ・2013～2014年度で、4種年代の選手数が減少(-1%)
- ・子どもたちのサッカー(スポーツ)との接点の減少(一部の学校現場など)
- ・年代カテゴリーごとに途切れるサッカー環境、1種年代のチーム数/選手数の減少
- ・年間サッカーカレンダーの再整備(過密スケジュール対策)
- ・登録制度のあり方の検証と改善(全国の登録料と連盟加盟費等の整理)、新メンバーシップ制度の導入
- ・スポーツの価値向上、クラブ文化のより一層の推進

●強化面に関しては、「世界でトップ10のチームになる」という目標を達成できませんでした。特に、上記アクションプランの中の「クラブとの連携強化と国内リーグの世界レベルへの発展」、「世界レベルの指導者の養成」については、課題が残る形となりました。そのほか、強化面で残った主な課題は下記の通りです。

- ・日本代表の強化(目標の未達成)、育成システムの検証と改善
- ・子どもたちの日常を支える指導者の一層の質の向上、暴力の根絶
- ・Jリーグの観客数の伸び悩みと地上波放送の苦況、Jリーグとの連携強化
- ・19～22歳代の試合環境不足

●組織面に関しては、概ね下記の点について、引き続き、強化・取り組みが必要と認識しています。

- ・国際力の強化、組織基盤の強化、JFA内のガバナンスおよび経営機能の強化
- ・JFA施策の事業評価
- ・日本サッカーの一層の価値向上、社会への積極的な関わりの創出とアプローチ
- ・地域/都道府県協会の一層の基盤強化
- ・サッカー施設不足

日本代表 ピッチ上の課題

- ・ボール支配率は相手を上回るが、チャンスに決められない。
- ・パスはまわるが、ゴールに向かうプレーが少なくチャンスの数が少ない。
- ・ほとんど攻められていないが、致命的なミスが起こり失点してしまう。
- ・互角の戦いをしている中で、個人の判断ミスから失点してしまう。
- ・相手の強い個を止められない。
- ・日本対策として、ロングボールを入れてくる、フィジカル、パワー勝負に持ち込まれる、相手の土俵でのサッカーを強いられる。
- ・日本を研究され、持ち味や長所を消される戦いをされると、打開できない。
- ・ピハインドの戦いで、精神的な強さをプレーで表現できない。
- ・負けている状態でも、後方でパスをまわすことを選択してしまう。
- ・技術では上回るがアグレッシブさに欠け、覇気のない試合になってしまう。
- ・相手の気迫に負け、球際やセカンドボールの拾い合いで負ける。

※2014年12月技術委員会発表

3. 環境分析とJFA事業構造分析

JFAは、サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献することを理念に掲げています。「JFA中期計画2015-2022」の策定にあたっては、サッカー界の現状・課題をしっかりと捉え、日本サッカーのより一層の飛躍に向けて、その解決に取り組みます。同時に、社会を取り巻く環境を見据え、サッカーを通じて、より多くの社会問題の解決にも挑みます。ここでは、社会環境分析を行うと共に、新たに迎える8年間の戦略を検討するにあたり、JFAの事業構造分析も行いました。



サッカー界を取り巻く環境

サッカー界を取り巻く環境を、下記の通り、PEST／SWOTの分析フレームで整理しました。日々変化する社会の中で、JFAは、常に社会の変化を的確に捉え、社会に貢献できる組織であることを目指します。

【社会環境分析: PEST】

政治的要因 (Politics)	経済的要因 (Economics)
<ul style="list-style-type: none"> ・ さらなるグローバル化の進展 ・ 中東を中心とした政情不安 ・ 老朽化する社会資本ストックの増加 ・ 小さな政府の加速 ・ PFIマーケットの拡大 ・ 教育制度改革の進展 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本経済の成長鈍化と財政悪化 ・ スタートアップ企業の増加 ・ 訪日外国人の増加と消費増加 ・ 先進国と成長国の経済規模の逆転 ・ 海外展開する企業の増加
社会的要因 (Social)	技術的要因 (Technology)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 総人口の減少による国際的なポジション劣後 ・ 少子高齢化 ・ 高齢者の増加とシニア市場の本格的な立ち上がり ・ 東京一極集中のさらなる拡大 ・ 国民医療費・介護対策費の上昇 	<ul style="list-style-type: none"> ・ SNS (ソーシャルネットワークサービス) の進展 ・ データ活用の重要性の高まり ・ 映像技術の進展 ・ ウェアラブル端末の普及

【自組織分析: SWOT】

機会 (Opportunities)	脅威 (Threats)
<ul style="list-style-type: none"> ・ サッカーが世界のスポーツをリード ・ 現政権下における株高傾向 ・ 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会決定 ・ 経済効果約3兆円、新規雇用約15万人 ・ スポーツ基本法に基づくスポーツ庁の設置 ・ 自治体による施設・インフラ投資の可能性 ・ スポーツへの関心の高まり ・ 社会のダイバーシティへの意識の高まり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の広告費の減少 ・ 少子高齢化 ・ オリンピック・パラリンピック競技大会へのスポンサー投資の偏り ・ 海外サッカーのアジア・日本への進出 ・ 東日本大震災の影響 ・ 日本経済の成長鈍化と財政悪化
強み (Strengths)	弱み (Weaknesses)
<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツの中のサッカーの高い人気度 ・ スポーツ界でのリーダーシップ ・ 法人化された47都道府県協会 ・ 普及活動の実績 ・ 全国規模の育成体制 ・ 社会貢献活動の実績 ・ 日本選手の海外での活躍 ・ 日本代表チーム(男女)への高い注目度 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Jリーグの観客数の伸び悩みと地上波放送の苦況 ・ 差別・暴力問題の顕在化 ・ 日本選手の海外流出(空洞化) ・ 世界におけるアジアサッカーの地位低迷 ・ 2014 FIFAワールドカップブラジルでのグループステージ敗退 ・ 日本代表チームのテレビ視聴率の低下傾向 ・ アンダーカテゴリー代表のアジアでの敗退 ・ サッカー施設の不足 ・ 登録チーム数の減少傾向。特に、1種年代のチーム数・選手数の減少 ・ 2013-2014年の4種年代の選手数減少(-1%) ・ サッカー(スポーツ)との接点の減少(学校現場) ・ クラブ文化の未定着

中期計画策定への示唆として

- ・ 少子化の中で、継続的な「JFAキッズプログラム」の推進や学校支援等による子どもたちがサッカーに触れる機会の創出は重要。
- ・ シニアサッカーのマーケットは確実に拡大。選手だけにとどまらず、シニア年代からも愛される日本代表を意識。
- ・ 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の決定もあり、(サッカーに限らず)日本代表の活躍は、より一層、注目を集める。その中で、サッカー日本代表は、FIFAワールドカップも含めて確実に勝ち抜いていけるよう、引き続き強化していくことが重要。
- ・ 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、キャンプ地誘致の動きも活発化が予想される。経済環境・国や地方公共団体の財政状況は厳しいが、スポーツ庁の設置も含め、サッカー施設整備に向けては追い風が吹いている。
- ・ サッカー界は、日本のスポーツをリードする存在である。スポーツ庁設置の動き、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に併せて、社会へのより積極的な関わりの創出やアプローチ、加えて国際力の強化、海外試合等でのマーケティングの強化、社会貢献活動の充実が重要。

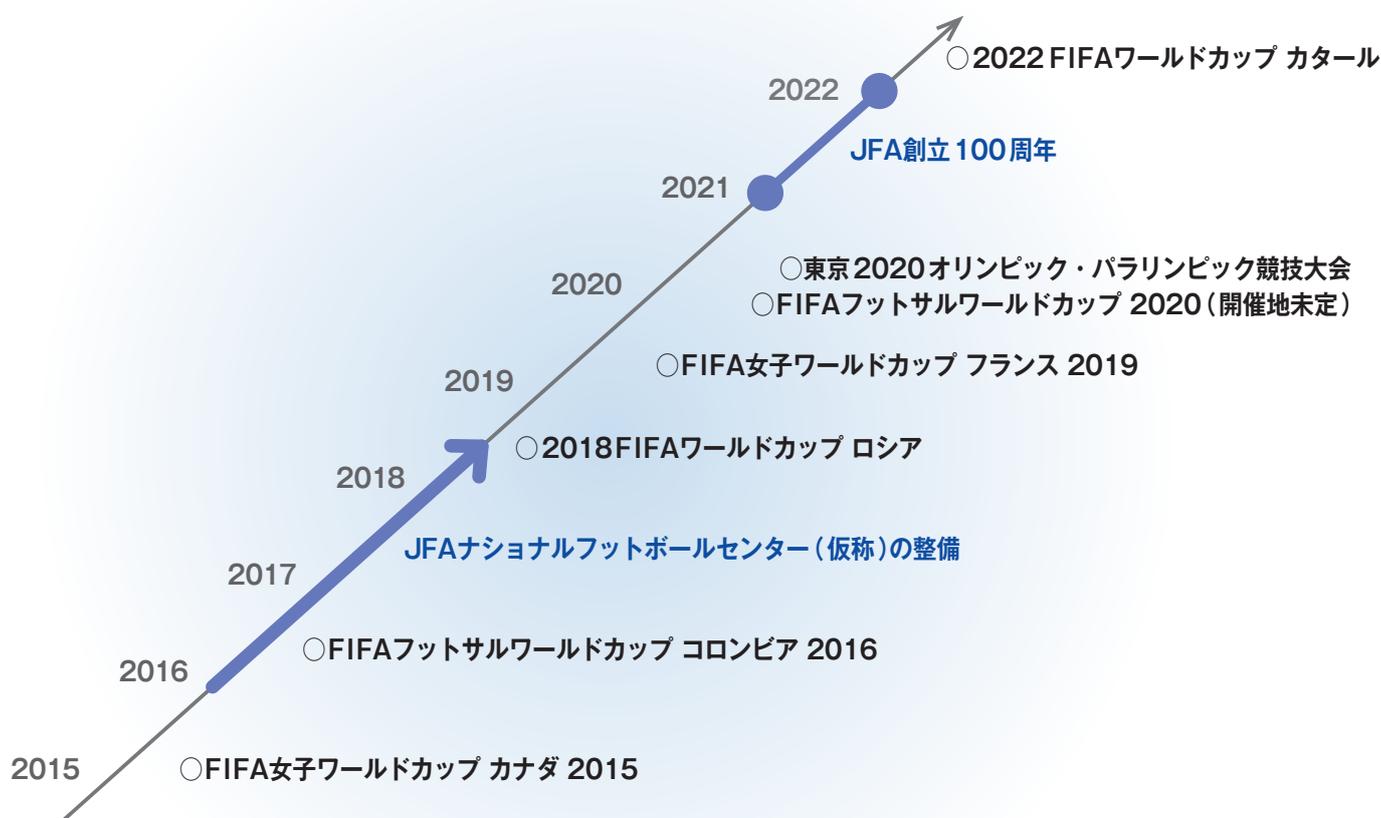
これから迎える8年間。

2018年(ロシア)と2022年(カタール)のFIFAワールドカップ。

そして、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催とJFA創立100周年。

2015年から2022年までの間に2度のFIFAワールドカップがあります。2018年のロシア、そして2022年のカタール。女子は、2015年にカナダ、2019年はフランスで開催される予定です。こうした中、JFAでは、日本代表の活動拠点として「JFAナショナルフットボールセンター(仮称)」を整備することを決定しています。

さらに、この中期計画の期間内には、2020年に開催される「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」、その翌年に「JFA創立100周年」が控えています。



JFAナショナルフットボールセンター(仮称)の整備

イングランド、スペイン、ドイツ、フランスなど、サッカー強豪国では、代表選手の練習拠点としてナショナルフットボールセンターを有することが世界のサッカー界の潮流となってきています。JFAでは、日本代表の強化活動をより一層充実させるため、「JFAナショナルフットボールセンター(仮称)」を整備することを決定しました。

代表選手の練習拠点としての機能だけでなく、日本のサッカー環境としての理想を追求し、これからのスポーツ施設整備のモデルとなることを目指します。良質な芝生のピッチや研修室はもちろん、スポーツを楽しむ仲間と共にアフタースポーツも充実した時間を過ごすことができるよう、ホスピタリティ機能を充実させます。

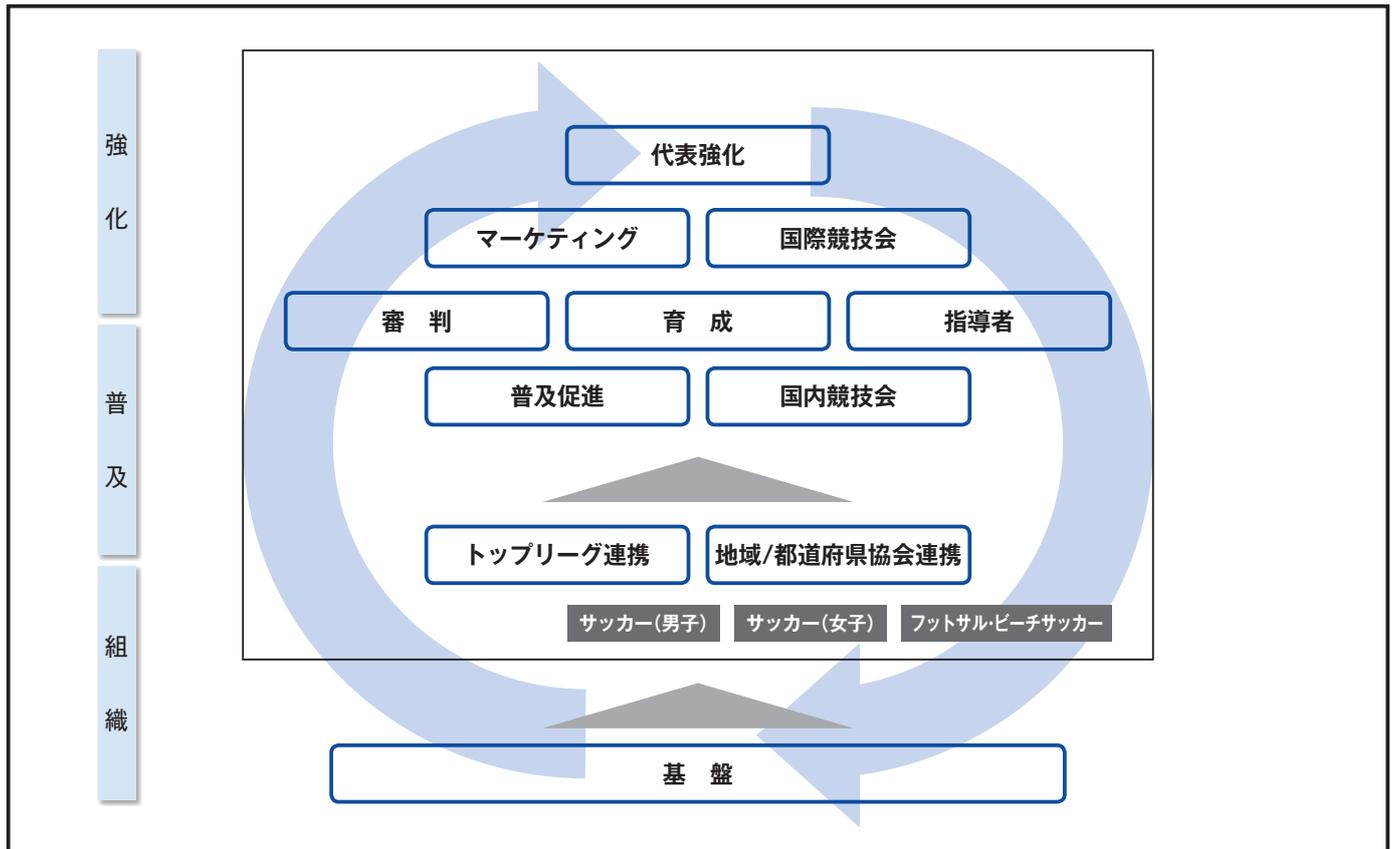
競技人口2億7千万人(FIFA調べ)とも言われるサッカーは、世界で最も多くの人々にプレーされているスポーツです。JFAナショナルフットボールセンター(仮称)は、世界中のサッカーファミリーを迎えるゲストハウスであり、日本サッカー界の顔となります。

JFAの事業構造

本中期計画の策定プロセスにおいて、JFAが実施する全ての活動を整理し、JFA全体の事業構造分析を行いました。その結果、JFAが行う活動を下記の11カテゴリーに分類しました。

このように分類することで、各カテゴリーの配分予算の状況など、JFA全体の大まかな事業バランスを見ることができ、JFAの活動全体が鳥瞰できます。各カテゴリーの事業の相関関係が把握しやすくなる上、事業総括や戦略立案、計画策定、経営分析が行いやすくなると考えています。

JFAの事業構造(11カテゴリー)



11カテゴリーごとの各事業・施策は、それぞれ独立して存在するものでなく、いずれも相互に関係しています。例えば、「指導者」の養成は「育成」にもつながり、「育成」は「代表強化」と切っても切れない関係にあります。「代表強化」も、代表チームが活躍することで子どもたちの憧れとなり、日本サッカーの価値の向上、サッカーの「普及推進」、「国内競技会」の発展につながります。

このように、「強化」と「普及」は車輪の両輪の働きを成し、また、それらが「トップリーグ連携」、「地域/都道府県協会連携」の活動により促進され、そして全ての活動をJFAの組織の「基盤」が支える構造になっています。

4. 新たな目標と基本戦略

「JFA中期計画2015-2022」では、「JFA2005年宣言」の具現に向けた中間地点として、新たに「JFAの目標2030」を設定しました。また、設定した目標を達成するため、8つの領域で成功要因(KSF: キー・サクセス・ファクター)を整理し、それを具現するための新たな「JFAミッション2015-2022」を定めました。このミッションを「JFAの目標2030」と共に多くのサッカーファミリーの方々と共有し、目標の達成に向けて全力で取り組みます。



新たな目標の設定

JFAは、「JFA2005年宣言」で掲げた「JFAの約束2050」の達成に向けて、2030年までに達成すべき新たな目標を設定しました。

JFAの約束2050

2050年までに、すべての人々と喜びを分かちあうために、ふたつの目標を達成する。

1. サッカーを愛する仲間=サッカーファミリーが1000万人になる。
2. FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームはその大会で優勝チームになる。

JFAの目標2030

[普及]

2030年までに、サッカーファミリーが800万人になる。

普及目標2018 サッカーファミリー560万人 普及目標2022 サッカーファミリー640万人

※選手・指導者・審判・運営スタッフ・サポーター等の普及目標の詳細は別途策定(46ページ参照)

[強化]

日本代表チームは、FIFAワールドカップに出場し続け、2030年までに、ベスト4に入る。

強化目標2018 FIFAランキング トップ20 強化目標2022 FIFAランキング トップ10

※選手・指導者・審判・運営スタッフ・サポーター等の普及目標の詳細は別途策定
※上記「日本代表チーム」は、SAMURAI BLUEを指す。

上記のふたつの目標を達成するために、
基盤整備に努め、2030年までに、世界でトップ3の組織になる。

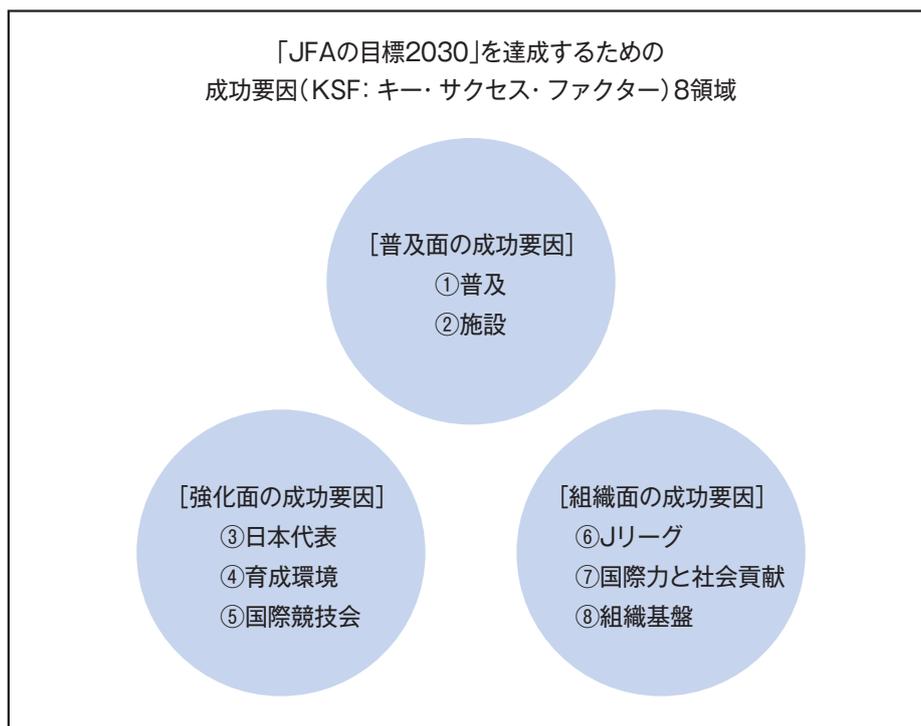
JFAの約束2015

2015年には、世界でトップ10の組織となり、ふたつの目標を達成する。

1. サッカーを愛する仲間=サッカーファミリーが500万人になる。
2. 日本代表チームは、世界でトップ10のチームとなる。

目標達成に向けた成功要因の整理と「JFAミッション2015-2022」の設定

JFAは、「JFAの目標2030」を達成するための成功要因(KSF:キー・サクセス・ファクター)を、下記の通り、8つの領域で整理しました。そして、2018年と2022年の普及目標、2018年と2022年の強化目標の達成に向けた2015年～2022年の重点的な事業・施策として、これらの成功要因を具現するための「JFAミッション2015-2022」を定めました。これは、2004年に策定した11のプレジデント・ミッション(旧キャプテンズ・ミッション)の内容も継承されています。「JFAの目標2030」と共に多くのサッカーファミリーの方々と共有し、「JFA2005年宣言」の具現に向けて、全力で取り組みます。



上記8つの成功要因を具現するための重点事業・施策

JFAミッション2015-2022

- Mission1. 普及施策の推進(JFAグラスルーツ宣言)
- Mission2. 施設整備の推進(JFAグリーンプロジェクト)
- Mission3. 日本代表の強化
- Mission4. 育成環境の充実
- Mission5. 国際競技会の充実
- Mission6. Jリーグとの協働
- Mission7. 国際力の強化と社会貢献の充実
- Mission8. 組織基盤の強化(JFAリフォーム)

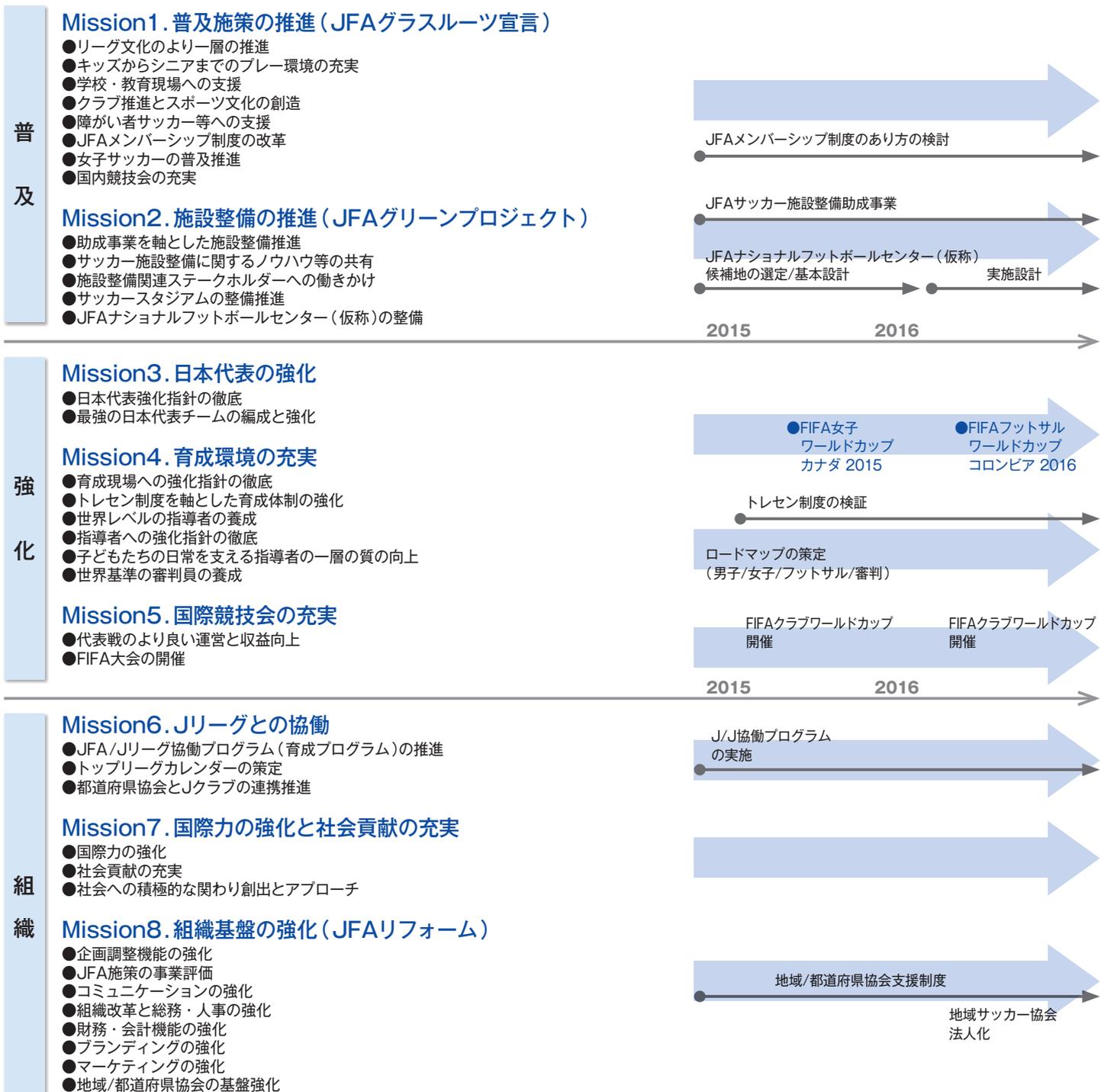
基本戦略

2015年から2022年までの8年間で、日本サッカーは新たなステージに移行します。

JFAはサッカーファミリーの拡大を図り、多くの国民がサッカーを楽しみ、人生に喜びを感じ、社会生活を充実させることができるよう、普及施策や施設整備の推進に努めます。特に、地域に根差したクラブ文化を醸成させると共に、スポーツが国民の生活の一部となるよう努め、日本に真の意味でのスポーツ文化を確立させます。

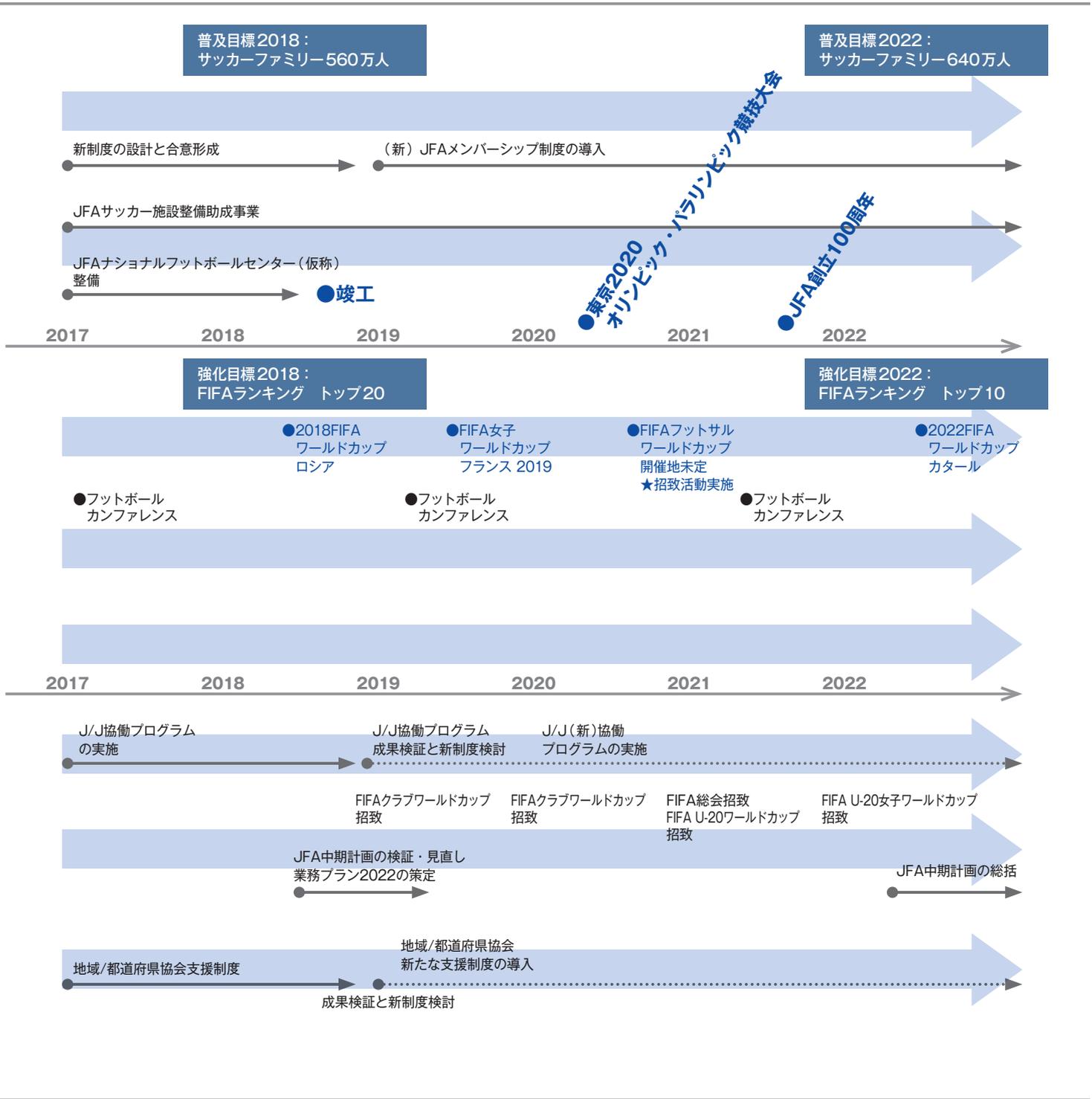
また、日本がFIFAワールドカップで優勝を争える国となるためには、今後も代表レベルの強化から都道府県、さらに市区郡町村レベルの育成に至るまで、チームや選手だけでなく指導者・審判・メディア・スポンサー・サポーターも含めた国全体のサッカーの総力が必要となります。Jリーグとの連携を強化し、日本代表の強化、育成環境の充実、そして国際競技会の充実に努めます。

[JFAミッション2015-2022]



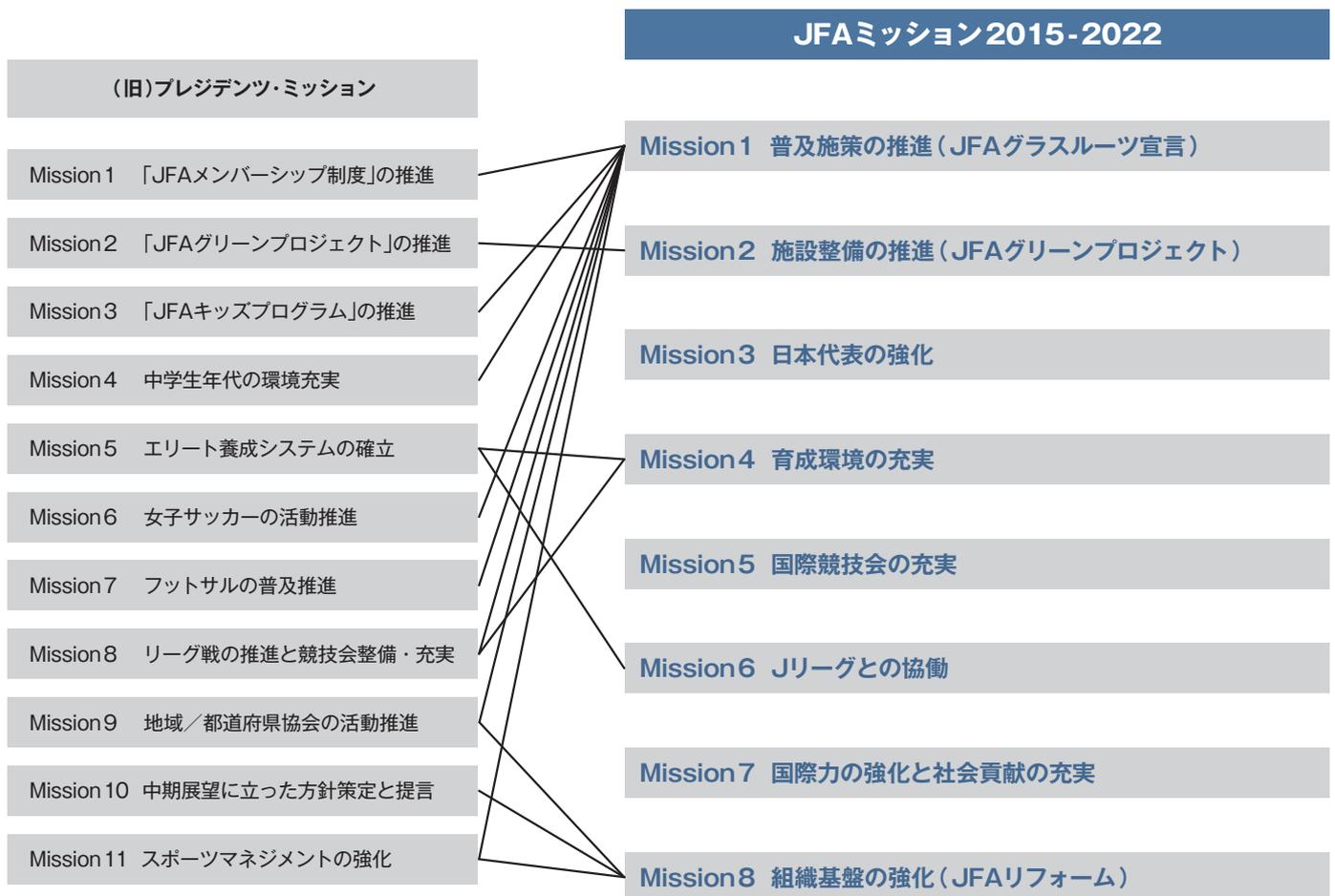
さらに、スポーツ・サッカーを日本の経済や産業構造の中で捉え、JFAのみでなく、地域/都道府県協会やJクラブの事業および組織の拡大を図ります。また、社会貢献活動をより充実させると共に、日本がスポーツ大国・サッカー王国となるために、これらの団体と協働し、スポーツ界のリーダーシップを取りながら、スポーツ庁をはじめとする関係省庁、自治体、スポーツ関係団体等に対して働きかけ、人事交流や強固なリレーションを構築します。同時に、JFAは日本のみならず、アジアや世界における位置付けを強く意識し、国際貢献や国際力の強化を推進し、常に世界基準で取り組みます。

JFAはこうした認識に基づき、2015年から2022年の8年間、下記「JFAミッション2015-2022」を柱に、新たな目標に向けてまい進します。



JFAミッション2015-2022

「JFA中期計画2015-2022」において新たに定めた「JFAミッション2015-2022」は、下記の通り、2004年に設定した11の旧プレジデント・ミッションの内容も継承されています。これまでのプレジデント・ミッションは、都道府県協会をはじめ、多くのサッカー関係者の人々の協力をいただき、強力に推進していくことができました。



5. アクションプラン2022

「JFA中期計画2015-2022」では、新たに設定した「JFAの目標2030」を達成すべく、8年間の基本戦略で設定した「JFAミッション2015-2022」を中心に、右記の通り、JFAの事業構造の11カテゴリーごとにアクションプラン2022を策定しました。

※JFAでは「アクションプラン2022」の他に、別途、2015年から2018年の4年間のより詳細な業務の実行計画を取りまとめた「業務プラン2018」を策定しています。

「JFAミッション2015-2022」と「アクションプラン2022」対照表

JFAミッション2015-2022	アクションプラン2022
Mission1 普及施策の推進 (JFAグラスルーツ宣言)	(1) 普及推進
Mission2 施設整備の推進 (JFAグリーンプロジェクト)	(2) 国内競技会
Mission3 日本代表の強化	(3) 審判
Mission4 育成環境の充実	(4) 指導者
Mission5 国際競技会の充実	(5) 育成
Mission6 Jリーグとの協働	(6) 代表強化
Mission7 国際力の強化と社会貢献の充実	(7) 国際競技会
Mission8 組織基盤の強化 (JFAリフォーム)	(8) マーケティング
	(9) トップリーグ連携
	(10) 地域/都道府県協会連携
	(11) 基盤
	<input type="checkbox"/> 女子サッカー
	<input type="checkbox"/> フットサル・ビーチサッカー



(1) 普及推進

中期計画では、「普及施策の推進」と「施設整備の推進」を新たなミッションと位置づけ、特に力を入れて推進します。「JFAグラスルーツ宣言」に基づき、年齢、性別、障がい、人種などに関わりなく、だれもが、いつでも、どこでも、安全・安心にサッカーを楽しめる環境づくりやきっかけづくりに努めます。特に、施設整備の推進にあたっては、日本代表の活動拠点となる「JFAナショナルフットボールセンター（仮称）」の整備を行うほか、助成事業を一つの柱に、サッカー界に蓄積されてきたノウハウを効率的に発信しながら、関係するステークホルダーへの働きかけも強化し、全国のサッカー場整備を推進します。

【現状の課題】

- ・2013-2014年度での4種年代の登録選手数の減少(-1%)
- ・子どもたちのサッカー(スポーツ)との接点の減少(一部の学校現場など)
- ・年代カテゴリーごとに途切れるサッカー環境、全体的なチーム数の減少、特に1種年代のチーム数・選手数の減少
- ・年間カレンダーの再整備(過密スケジュール対策)
- ・登録制度のあり方の検証と改善(全国の登録料と連盟加盟費等の整理)
- ・新メンバーシップ制度の導入(2種・1種移行時の8割の登録離れ、全体で2割の非更新者)
- ・サッカー場の不足

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人
- ・2022年：サッカーファミリー640万人

【重点施策】

- ・リーグ文化のより一層の推進 **Mission 1**
 - 健全なリーグ環境実現に向けた側面支援
 - 年間サッカーカレンダーの調整
- ・キッズからシニアまでのプレー環境の充実 **Mission 1**
 - 「JFAキッズプログラム」の推進・強化
 - シニア年代への積極的なアプローチ
- ・学校・教育現場への支援 **Mission 1**
 - 学校体育サポート
 - 部活動への支援
 - 部活動の顧問の環境サポート
- ・クラブ支援とスポーツ文化の創造 **Mission 1**
 - 多面的なクラブ支援の実施(多世代クラブ化推進ほか)
 - 「JFAスポーツマネジャーズカレッジ(SMC)」の実施
- ・障がい者サッカー等へのサポート **Mission 1**
 - 統括団体の設置と関連団体の法人化
 - 指導者講習会・審判講習会等への障がい者支援プログラムの導入
- ・JFAメンバーシップ制度の改革 **Mission 1**
 - 既存の登録制度のあり方の検証と登録推進
 - 地域/都道府県協会における各種連盟等のあり方の検討
 - 非登録更新者・サポーター・ファンも含めた新たなメンバーシップ(会員)制度の検討
- ・施設整備の推進(JFAグリーンプロジェクト) **Mission 2**
 - 助成事業を軸とした施設整備推進
 - サッカー施設整備に関するノウハウ等の共有
 - 施設整備関連ステークホルダーへの働きかけ
 - サッカースタジアムの整備推進
 - JFAナショナルフットボールセンター(仮称)の整備
- ・東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会関連施策の実施
 - 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした施設整備推進とサッカーファミリー増加施策の実施
 - 日本代表特別強化プランの実施
 - 競技運営を通じた大会への貢献とノウハウの蓄積

(女子サッカー)

- ・女子サッカーの普及推進 **Mission 1**
 - 中学生年代の受け皿充実・拡大
 - 「JFAなでしこひろば」の推進
 - なでしこ普及コーディネーターの設置推進

(フットサル)

- ・J-futsal(エンジョイ登録)の推進
- ・「JFAエンジョイ5」のあり方検討とその他のエンジョイ大会の新設の検討
- ・民間フットサル施設との連携と公認化等の検討
- ・学校スポーツとしてのフットサルの導入推進

<JFAグラスルーツ宣言>



Football for All サッカーを、もっとみんなのものへ。

年齢、性別、障がい、人種などに関わりなく、だれもが、いつでも、どこでも。私たち日本サッカー協会は、サッカー、そしてスポーツの持つすばらしさをもっともっと、たくさんのおみなさんと分かち合い、育みたいと考えています。

だれもが、サッカーの楽しさに触れられるように！
サッカーとのすばらしい出会いやきっかけを、たくさんご用意します。

だれもが、サッカーをもっと身近に感じられるように！
自分のニーズや希望にあったサッカーの選択肢を、次々と増やします。

だれもが、心からサッカーを楽しめるように！
安全に、安心してサッカーを楽しめる環境を、しっかりと整えます。

<JFAの主な普及推進活動>

・JFAフェスティバル

多くの人々にボールを蹴る楽しさや家族でスポーツをする喜びを味わってもらうため、全国各地でさまざまなフェスティバルを開催している。

○JFAキッズサッカーフェスティバル

10歳以下のキッズ年代を対象に、各都道府県サッカー協会が開催。

○JFAレディース/ガールズサッカーフェスティバル

18歳以下の年代を「ガールズ」、18歳以上の女性を「レディース」と名付け、初心者も含めて全ての女性が楽しくサッカーに親しめる機会を提供。

○JFAファミリーフットサルフェスティバル

フットサルを通じて、ボールを蹴る楽しさや家族で遊ぶ喜びを実感してもらうことを目的に開催。

○JFAフットボールデー

2008年からJFA創立記念日である9月10日を「JFAフットボールデー」と制定。多くの人々にサッカーの楽しさを味わってもらうため、各都道府県協会のもと、全国各地でさまざまなイベントを開催。

・JFAなでしこひろば



女性が「気軽に」「楽しく」「継続して」サッカーやフットサルを楽しめる環境づくりを目的とした女子サッカーの普及施策。認定団体の協力のもと、全国各地でサッカークリニックなどを展開している。

・JFAエンジョイ5～JFAフットサルエンジョイ大会～



民間フットサル施設などで日常的にフットサルを楽しんでいる「エンジョイ志向」のプレーヤーを対象にした大会。年代やレベルなどに応じたカテゴリーを設け、老若男女問わず誰もが参加できる。

※そのほか、株式会社ユニクロやキリングループと協力し、「JFAユニクロサッカーキッズ（JFAユニクロフットボールキッズ）」「JFA・キリン レディース/ガールズフェスティバル」「JFA・キリン ファミリーフットサルフェスティバル」などを全国各地で展開している。

<東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会関連>

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に対するJFAのコンセプトをまとめ、サッカーの普及や環境整備を進める。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会 JFA “JAPAN” コンセプト

Join the DREAM ～夢を繋ごう～

私たちは世界の人々がオリンピックを通じて一つになるために

- ・キャンプ地の人々と出場国の国際交流をサポートし、地域、チームそれぞれに活力をもたらす環境を整えます
- ・競技の運営や大会サポートの機会を活用し、今後世界に羽ばたく国際人の養成を達成します

Achieve the DREAM ～夢を勝ち取ろう～

私たちは、過去最高のオリンピック・パラリンピックを実現し、オリンピックムーブメントを全国的なものとするために

- ・男女日本代表は世代を超えて貫いてきたフェアプレー精神溢れるサッカーで自国にメダルをもたらします
- ・これまでの大会運営実績やノウハウを還元し、安全・快適な環境のもと、競技者が最高のパフォーマンスを発揮できる舞台を整えます

Pass the DREAM ～夢を紡ごう～

私たちは健康的で活力ある社会を創造し、次の世代に引き継いでいくために

- ・年齢、性別、障がい、人種などに関わりなくサッカーをプレーできる環境を整えます
- ・だれもが、いつでも、どこでも、サッカーをプレーできる環境を整えます

Access the DREAM ～夢に架けよう～

私たちは、パラリンピックを通じた障がい者スポーツの発展に貢献するために

- ・障がいの有無に関係なくサッカーにアクセスできる環境を整えます
- ・JFA、各種障がい者サッカー団体に蓄積されている様々なノウハウをつなぎあわせることで、互いが高め合える環境を整えます

“Nadeshiko” the DREAM ～夢を輝かせよう～

私たちは日本中のスポーツを愛する「なでしこ」たちがより美しく輝く社会を実現するために

- ・女性がサッカーを楽しめる機会・場所を増やします
- ・女性がリーダーとして活躍できる風土や文化を醸成します



(2)国内競技会

日本のサッカーの「普及」と「強化」を担う国内競技会。その認識に基づき、登録者にとってより一層魅力ある競技会づくりに努めます。そのために、常にプレーヤーズファーストの観点に立ち、あらゆる種別・レベルにとって最適なリーグおよびトーナメントをつくります。また、参加者が無理なく楽しめるリーグ環境となるよう、開催エリアの設定や年間のサッカーカレンダーづくりに細心の注意を払うと共に、より充実した高付加価値の競技会にするべく、リーグ運営を支える多くの関係者と協働していきます。

【現状の課題】

- ・天皇杯全日本サッカー選手権大会のより一層の活性化
- ・国内競技会の認知度の向上、高付加価値化
- ・各種競技会の大会要項の整合性
- ・各カテゴリーの特性に合わせた、出場しやすい競技会の整備
- ・過密なリーグ対応、大会日程の調整
- ・チーム数の減少、特に1種年代のチーム数・選手数の減少対応（社会人連盟とのあり方の検討）
- ・シニア年代の活性化

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人
- ・2022年：サッカーファミリー640万人

【重点施策】

- ・国内競技会の充実 **Mission 1**
 - 天皇杯全日本サッカー選手権大会のより一層の活性化
 - 2種・3種・4種年代のリーグ環境のより一層の充実と高付加価値化
 - 各種別の大会要項の整理
 - 年間サッカーカレンダーの整理
 - 社会人連盟との協働と1種年代の活性化
 - シニア年代の競技会の充実

(女子サッカー)

- ・2種・3種・4種年代の競技会の充実とプレー環境の充実
- ・全日本高等学校女子サッカー選手権大会の価値向上

(フットサル)

- ・全日本フットサル選手権大会の価値向上

<JFA主催全国大会など>

<p>第1種 原則として年齢制限のない選手により構成される(*)。 Jリーグに所属するクラブや社会人チーム、クラブチーム、専門学校チームなど</p>	<p>天皇杯全日本サッカー選手権大会 全国社会人サッカー選手権大会 全国地域サッカーリーグ決勝大会 日本スポーツマスターズ(サッカー競技) 全日本大学サッカー選手権大会 総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント デンソーカップチャレンジサッカー デンソーカップサッカー 大学日韓(韓日)定期戦 国民体育大会(サッカー競技) 成年男子 全国クラブチームサッカー選手権大会 全国専門学校サッカー選手権大会 全国高等専門学校サッカー選手権大会 明治安田生命J1リーグ ※ 明治安田生命J2リーグ ※ 明治安田生命J3リーグ ※ Jリーグヤマザキナビスコカップ FUJI XEROX SUPER CUP 日本フットボールリーグ(JFL)</p>	 
<p>第2種 (U-18) 18歳未満の選手で構成される(*)。 Jクラブのユースチームや高校の部活動、各地のクラブチームなど</p>	<p>高円宮杯U-18サッカーリーグチャンピオンシップ 国民体育大会(サッカー競技) 少年男子 全国高等学校サッカー選手権大会 全国高等学校総合体育大会(サッカー競技) 日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会 Jユースカップ/Jリーグユース選手権大会 高円宮杯U-18サッカーリーグ (プレミアリーグ、プリンスリーグ、地域リーグ、都道府県リーグ)</p>	
<p>第3種 (U-15) 15歳未満の選手で構成される(*)。 Jクラブのジュニアユースチームや中学校の部活動、各地のクラブチームなど</p>	<p>高円宮杯全日本ユース(U-15)サッカー選手権大会 全国中学校体育大会/全国中学校サッカー大会 JFAプレミアカップ 日本クラブユースサッカー選手権(U-15)大会 メニコンカップ日本クラブユースサッカー東西対抗戦(U-15)</p>	
<p>第4種 (U-12) 12歳未満の選手で構成される(*)。 小学校の部活動、各地のクラブチームなど</p>	<p>全日本少年サッカー大会 全国少年少女草サッカー大会</p>	
<p>女子 女子の選手で構成される。ただし、U-12未満の選手は、第4種チームに登録</p>	<p>皇后杯全日本女子サッカー選手権大会 国民体育大会(サッカー競技) 女子 全日本大学女子サッカー選手権大会 全日本高等学校女子サッカー選手権大会 全国高等学校総合体育大会(サッカー競技) JOCジュニアオリンピックカップ全日本女子ユースサッカー選手権大会 全日本女子ユース(U-15)サッカー選手権大会 全国レディースサッカー大会 全国レディースサッカー大会 [レディース・エイト(40歳以上)オープン大会] プレナスなでしこリーグ ※ プレナスチャレンジリーグ ※</p>	
<p>シニア 40歳以上の選手で構成される。</p>	<p>全国シニア(60歳以上)サッカー大会 全国シニア(50歳以上)サッカー大会 全国シニア(40歳以上)サッカー大会</p>	
<p>フットサル サッカー同様、第1種~第4種がある(*)。</p>	<p>全日本フットサル選手権大会 バーモントカップ全日本少年フットサル大会 全日本大学フットサル大会 全日本ユース(U-18)フットサル大会 全日本ユース(U-15)フットサル大会 全日本女子フットサル選手権大会 全日本女子ユース(U-15)フットサル大会 SuperSports XEBIO Fリーグ ※ Fリーグオーシャンカップ</p>	
<p>ビーチサッカー ビーチサッカー専門の登録制度はなく、サッカーもしくはフットサルの登録選手で構成される。</p>	<p>全国ビーチサッカー大会</p>	

*第2・3・4種の場合、それぞれ高校在学中、中学校在学中、小学校在学中の選手にはこの年齢制限を適用しない。

※そのほかプレーオフ、入替戦、オールスター戦などを開催

(3) 審判

サッカーの活動に欠かせない審判。JFAは、全てのカテゴリーの競技会において、チーム・選手の力を引き出せる高いレベルの審判員を安定的に派遣できることを目指しています。また、常に世界基準を意識し、審判員、審判インストラクターの養成も推進し、世界をリードする日本型の審判指導・育成システムを確立します。さらには、審判活動に触れた多くの人々が継続して活動できるよう、審判としてのサッカーキャリアの構築イメージを共有するなど、審判の世界の魅力をより一層高めます。

【現状の課題】

- ・国際審判員の若年化に伴う将来性のある審判員の計画的強化体制づくり
- ・若年層の審判員への機会増大と育成体制づくり
- ・審判活動がしやすい環境づくり

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人（審判員32万人）
- ・2022年：サッカーファミリー640万人（審判員35万人）

【重点施策】

- ・世界基準の審判員の養成 **Mission4**
 - トプレフェリーの強化
- ・審判員の普及推進と育成
 - ユース審判員の普及推進
 - チーム/選手の力を引き出せる高いレベルの審判員の育成
 - 審判インストラクターの能力向上と機会増大
 - JFAレフェリーアカデミー構想（レフェリーキャラバン等を含む）の実現
- ・地域/都道府県協会審判委員会との連携強化
- ・情報伝達、共有ネットワークの構築・維持・改善
- ・競技規則の理解促進
- ・ロードマップの策定

（女子サッカー）

- ・女子審判員の普及推進と育成

（フットサル）

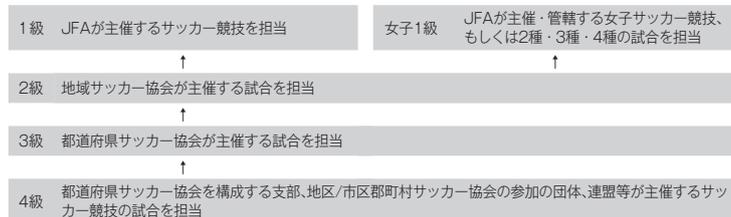
- ・審判員、審判インストラクター制度の充実

<JFAの審判養成事業>

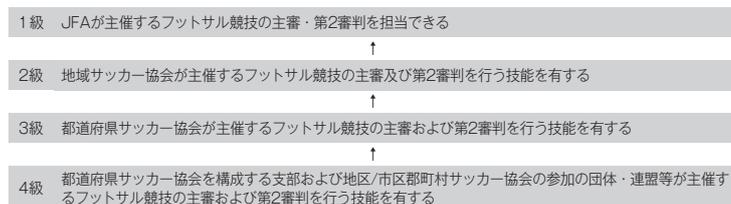
サッカーおよびフットサルの審判資格は、対象となる試合のレベルに応じて1級～4級まであり、どの階級の審判員も更新講習会などで研さんを積み、レベルアップに努めている。JFAは、審判登録制度の充実を図り、さまざまな審判員養成事業によって、子どもの試合からプロリーグに至るまでフェアな試合を推進している。

■審判制度

<サッカー>



<フットサル>



・サッカー審判インストラクター制度

サッカー審判員を指導するインストラクターの資格はS級、1～3級、フットサル審判員を指導するインストラクターは1級～3級まであり、それぞれ対象となる審判員および下級の審判インストラクターに対し、指導および評価・認定審査を行っている。

・審判トレーニングセンター

全国の審判インストラクターおよび審判員を対象に、審判員の養成や人材発掘、競技規則の解説、審判技術の提供を行っている。知識や技術の習得だけでなく、フィットネスやパーソナリティーの向上も目指す。

・プロフェッショナルレフェリー制度

トップレベルの審判員が審判活動に専念できるための制度。プロフェッショナルレフェリーは自身のレベルアップに励みながら全国で講義を行うなど、日本の審判界全体のレベルの向上にも貢献している。

・レフェリーカレッジ制度

優秀な若手2級レフェリーを短期間で集中的に指導して、トップレフェリーに養成する目的で2004年に創設した制度。

・審判交流プログラム

各国サッカー協会から審判員やインストラクターを招へいしたり、日本から派遣するなど、審判員の国際交流とともに国際経験の機会の創出を図っている。



(4)指導者

日本代表チームが世界のトップクラスで争っていくためには、将来の代表選手が育つ環境としてのグラスルーツが重要です。そして、その子どもたちのサッカーの成長の鍵を握るのは、クラブで子どもたちに日々接する指導者です。子どもたちの日常のサッカーが、あらゆる面でレベルアップできるよう、また、プレーヤーズファーストの観点を忘れず、選手が主体的にサッカーを楽しめる環境づくりが行えるよう、より一層充実した指導者養成を行います。同時に、常に世界基準を意識し、海外との交流機会を増やすことで、代表チームを率いることのできる世界レベルの指導者の養成にも努めます。

[現状の課題]

- ・代表チームを率いることができる世界レベルの指導者の養成
- ・指導者のより一層の質の向上と暴力根絶
- ・Jリーグとのさらなる連携、相互研鑽

[リンクする目標]

- ・2018年：サッカーファミリー560万人(指導者16万人)
- ・2020年：サッカーファミリー640万人(指導者17.5万人)

[重点施策]

- ・世界レベルの指導者の養成 **Mission 4**
 - 指導者の海外派遣(制度設計と実施)
 - 海外指導者の招へい(制度設計と実施)
- ・指導者への強化指針(※)の徹底 **Mission 4**
 - ※「2015 日本代表 強化指針」(37ページ)を参照
- ・子どもたちの日常を支える指導者の一層の質の向上 **Mission 4**
 - 指導者講習会およびリフレッシュ研修会のより一層の質の向上と積極展開
 - 暴力の根絶に向けた取り組みの強化
 - 47FAインストラクターへの研修と資質向上
- ・フットボールカンファレンスやリフレッシュ研修、Jエントリー等の充実による情報共有・発信の強化

(女子サッカー)

- ・女子指導者の養成

(フットサル)

- ・フットサル指導者制度の確立

＜JFAの指導者養成事業＞

JFAは、指導者のニーズに合わせた各種講習会を開催している。10歳以下の子どもにスポーツやサッカーの楽しさを伝える「公認キッズリーダー」からプロチームを指導できる「公認S級コーチ」など、フットサルを含む12の講習会を開催。修了者にライセンスを付与し、JFAの活動やトレーニング方法などの最新情報や指導の機会を提供している。

■指導者養成講習会－JFA指導者ライセンス体系－



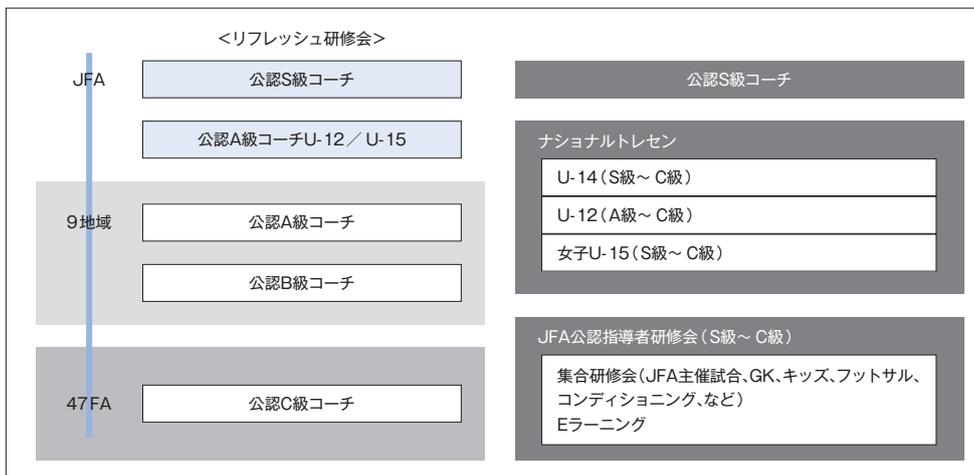
・インストラクター制度

より優秀な指導者を輩出するため、その指導を担うインストラクターの養成にも取り組んでいる。インストラクターはJFAが開催する指導者養成講習会やリフレッシュ研修会で講師を務め、JFAの強化育成方針やその具体的な施策などを全国各地の指導現場に広めていく役割を担っている。

- JFA技術委員、JFAナショナルコーチングスタッフ、特別招へい講師
現代サッカーの動向、指導法に関するより専門的かつ高度な情報などを公認S級コーチに提供する。
- JFAナショナルトレセンコーチ
公認A級・B級コーチ養成講習会やリフレッシュ研修会で、JFAの強化育成方針やその具体的な施策などを全国各地の指導現場に広める。
- 47FAチーフインストラクター、47FAインストラクター
47FAの指導者養成を担っている。47FAチーフインストラクターは公認C級コーチリフレッシュ研修会で講師を務める。
- 公認キッズリーダーインストラクター
公認キッズリーダー養成講習会で講師を担当する。

・リフレッシュ研修会

JFAでは指導者資格の取得同様、レベルアップのための自己研さんが重要であると考え、各種リフレッシュ研修会を開催している。



・フットボールカンファレンス

2年に一度、全国の指導者を一堂に集めて開催。海外から優れた講師を招へいしてサッカー先進国の知見を得たり、国内外の活動報告やディスカッションなどを実施して、日本サッカーが進むべき方向性を全国の指導者と共有している。



(5)育成

中期計画では、「育成環境の充実」を新たなミッションとして位置づけました。選手育成を所管する技術委員会では、日本サッカーの強化に関する現状の課題を分析し、新たに「2015 日本代表 強化指針」を策定し、全国の選手育成の現場にも徹底していくこととしました。SAMURAI BLUEや各年代カテゴリーの日本代表選手の輩出を目標として、技術委員会のあり方をはじめ、現在のトレセン制度のあり方を検証・改革すると共に、地域/都道府県協会、Jリーグをはじめとするトップリーグとの連携を強化し、サッカーを通じた豊かな人間形成も意識した、より充実した長期一貫指導体制を構築します。

【現状の課題】

- ・ JFAエリートプログラムの再検証
- ・ JFAアカデミーの検証と改革
- ・ 地区トレセン、都道府県トレセンの質的向上
- ・ 選手育成の方向性の日本全体への共有
- ・ 19～22歳代の試合環境の不足
- ・ Jリーグアカデミーとの連携強化

【リンクする目標】

- ・ 2018年：FIFAランキング トップ20
- ・ 2022年：FIFAランキング トップ10

【重点施策】

- ・ 育成現場への強化指針(※)の徹底 **Mission4**
 - ※「2015 日本代表 強化指針」(37ページ)を参照
- ・ トレセン制度を軸とした育成体制の強化 **Mission4**
 - トレセン制度の検証と質的向上を目指した施策の推進
 - JFAエリートプログラムの検証
 - キッズエリートのあり方の検証
 - 都道府県協会における一貫指導体制の確立と育成担当の専任化
- ・ JFAアカデミーの検証と改革
- ・ JFA/Jリーグ協働プログラムによる育成施策の展開・発信
 - ※詳細は「(9)トップリーグ連携」に記載
- ・ 中体連・高体連・大学連盟と連携した育成推進
- ・ ロードマップの策定

(女子サッカー)

- ・ トレセン制度の充実
- ・ JFAアカデミー(女子)の充実と他地域展開の検討

(フットサル)

- ・ 大学フットサルの強化と組織充実

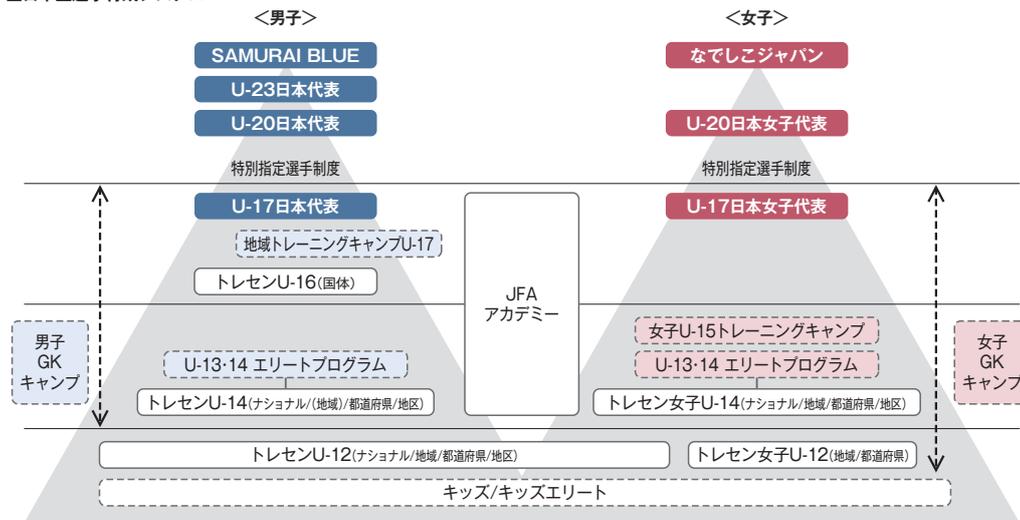
<世界を見据えた強化>

JFAは、「世界を基準とした強化策の推進」のもと、選手育成や指導者養成に取り組んでいる。各年代の世界大会を分析・検証して課題を抽出し、代表チームの強化やユース育成、指導者養成などの現場で克服を試み、世界大会に挑戦するというサイクルを重視。世界のトレンドや強化育成に関する情報、方向性を日本サッカー界全体で共有し、系統的な指導で選手のレベルアップを図っている。

■三位一体+普及の強化策



■日本型選手育成システム



<選手育成の主な取り組み>

- ・ **トレセン制度**
将来を嘱望される選手を年代ごとに集めて一定期間、充実した環境の下で指導するシステム。選手の発掘・強化だけでなく、全国各地にJFAの方向性や情報を伝える双方向の機能も有している。
- ・ **エリートプログラム**
男女のU-13/14年代を対象に、ナショナルトレセンやユース年代につながる日本選抜としての役割を担っている。年3回、5～6日間のキャンプと遠征を実施。
- ・ **ナショナルGKキャンプ**
将来の日本代表を担うGKの育成・強化を目的に、年1回、全国からU-15/18年代を各10人招集し、キャンプを実施。
- ・ **女子GKキャンプ**
将来の日本女子サッカーを支えるU-12～U-18年代のGKを招集し、年4回キャンプを実施。
- ・ **JFA・Jリーグ特別指定選手制度／女子：特別指定選手制度／Fリーグ特別指定選手制度**
Jリーグやなでしこリーグ、Fリーグに加盟していないチームに所属する選手が、JFAの認定を受けて所属チームに登録したまま各リーグの活動に参加できる制度
- ・ **なでしこ海外強化指定選手**
2015年のFIFA女子ワールドカップと2016年のオリンピック競技大会のときにチームの主軸となるである選手に、世界レベルのトレーニングや試合を経験させる制度
- ・ **JFAアカデミー**
長期にわたって選手を教育・指導するエリート育成機関。ロジック型の福島校のほか、週末帰省型の熊本宇城校、堺校、今治校がある。サッカーのみならず、国際社会にも貢献できる真のリーダーの育成を目指している。
- ・ **ゲーム環境の整備**
学校の部活動や地域のクラブチーム、Jクラブアカデミーなどで活動する全ての選手が年間を通じて数多く試合を経験できるよう、各種大会の整備やリーグ化、U-12年代の少人数制サッカーの推奨などを実施。



(6)代表強化

中期計画では、「日本代表の強化」を新たなミッションとして位置づけました。SAMURAI BLUEをはじめとした日本代表チームの活躍は、日本サッカーの価値の向上に直結し、多くの子どもたちの憧れとなることで普及にもつながります。

2019年までには、その代表チームの活動拠点となる「JFAナショナルフットボールセンター（仮称）」が整備され、代表強化活動により専念できる環境が整います。技術委員会が策定した「2015 日本代表 強化指針」に基づき、SAMURAI BLUEにとどまらず、各カテゴリー・年代の代表チームの強化に努め、また、常にベストのパフォーマンスを発揮できるよう万全のサポート体制を構築すると共に、選手の所属クラブ等とのコミュニケーションを密にし、代表チームの円滑な活動に努めます。

【現状の課題】

- ・男子サッカーの各代表カテゴリーにおける成績不振
- ・今後の強豪国との戦略的なマッチメイク
- ・コーチングスタッフおよびトレーニング環境の充実

【リンクする目標】

- ・2018年：FIFAランキング トップ20
- ・2022年：FIFAランキング トップ10

■各大会成績目標

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
FIFAランキング（男子）	→	→	→	20位	→	→	→	10位
FIFAワールドカップ				ベスト16				ベスト8
オリンピック競技大会（男子）		メダル獲得				メダル獲得		
FIFA U-20 ワールドカップ	-		ベスト16		ベスト8		ベスト8	
FIFA U-17 ワールドカップ	-		ベスト8		ベスト8		ベスト8	
FIFAランキング（女子）	4位	→	→	→	2位	1位	→	→
FIFA女子ワールドカップ	優勝				優勝			
オリンピック競技大会（女子）		優勝				優勝		
FIFA U-20 女子ワールドカップ		優勝		優勝		優勝		優勝
FIFA U-17 女子ワールドカップ		優勝		優勝		優勝		優勝
FIFAフットサルワールドカップ		ベスト8				ベスト4		
FIFAビーチサッカーワールドカップ	ベスト4		ベスト4		ベスト4		ベスト4	

【重点施策】

- ・日本代表 強化指針（※）の徹底 **Mission3**
 - ※「2015 日本代表 強化指針」（次ページ）を参照
- ・最強の日本代表チームの編成と強化 **Mission3**
 - SAMURAI BLUEの強化
 - アンダーカテゴリー日本代表の強化
 - 戦略的なマッチメイクのあり方の検証
 - コーチングスタッフ・サポートスタッフの強化

（女子サッカー）

- ・なでしこジャパンの強化 **Mission3**

（フットサル・ビーチサッカー）

- ・フットサル・ビーチサッカー日本代表の強化 **Mission3**



SAMURAI BLUE

U-23日本代表

U-20日本代表

U-17日本代表

2015 日本代表 強化指針

➡ 原点 回 帰 サッカーの本質に立ち返る

◆ゴールに向かう意識 (Toward the Goal)

- ➔ 奪った後の優先順位は、まずゴールへ。
- ➔ DFの裏を狙い、縦への推進力をチーム、個人で出すこと。

◆ボールの奪い合いの攻防で勝つこと (Duel on 1 vs. 1)

- ➔ 球際の闘い、フィジカルコンタクトで勝つこと。
- ➔ 相手からボールを奪いに行く。奪いに来られても失わない。

◆ペナルティエリア内の質の向上 (Quality in the BOX)

- ➔ シュートを打つこと、打たせないことへの拘り。
- ➔ アグレッシブさ、泥臭さ、執念をプレーで表現する。

➡ Japan's Way 日本人選手のストロングポイントを活かす

◆スピードとテクニックで勝負 (Speed & Technique)

- ➔ 動きながらプレーし、早くボールを動かす。
- ➔ 個人でもグループでも積極的に仕掛けていく。

◆コレクティブな闘い (Collectivity)

- ➔ 全員攻撃、全員守備。チームの勝利のために闘う。
- ➔ 攻守に複数の選手が連動し、アクションを起こす。

◆運動量/走力で圧倒 (Keep Moving)

- ➔ 「PASS&GO」で足を止めない。動きながらプレーをする。
- ➔ 攻守ともに相手に走り負けしない。

➡ 世界基準へ 課題の克服

◆フィジカル面の更なる向上 (Physical Ability)

- ➔ 強さや太さ、逞しさや激しさを求めていく。
- ➔ Duelでの勝負強さ。簡単に倒れない。

◆戦術的柔軟性 (Tactical Flexibility)

- ➔ 相手の特徴や戦術によって闘い方を柔軟に変化させる。
- ➔ 自分たちの望む展開にならずとも、したたかに闘い勝点を得る。

◆勝者のメンタリティの獲得 (Winning Mentality)

- ➔ 闘う姿勢を90分続ける、あきらめない、下を向かない。
- ➔ 勝負、ディティールに拘り、貪欲に勝つことだけを考える。
- ➔ 相手にコンプレックスをもたない。

※2015年4月技術委員会策定

(7)国際競技会

サッカーは、世界で最も多くの人々に愛されているスポーツです。そして、その世界大会であるFIFAワールドカップは、世界で最も大きなスポーツの祭典です。代表チームを結成し、海外の代表チームと競う国際競技会に参加することは、日本サッカーの最も大きな喜びの一つです。日本代表が世界の頂点を目指して強豪国と競う国際競技会の盛り上がりは、サッカーを夢見る子どもたちの憧れとなり、サッカーの普及、そして、日本サッカーの価値向上につながります。JFAは、日本代表の強化に向けた戦略的なマッチメイクを行い、より多くのファン・サポーターの人々に喜んでもらえるよう、国際競技会のさらなる魅力向上に努めます。

[現状の課題]

- ・ FIFAワールドカップ終了後の代表戦視聴率の低下
- ・ 収益向上に向けたスタジアム構造の限界
- ・ FIFA大会の招致とその収益の確保
- ・ 新国立競技場(ナショナルスタジアム)の活用

[リンクする目標]

- ・ 2018年：サッカーファミリー560万人／FIFAランキング トップ20
- ・ 2022年：サッカーファミリー640万人／FIFAランキング トップ10

[重点施策]

- ・ 代表戦のより良い運営と収益向上 **Mission5**
 - イベント運営の強化
 - 競技対応・競技運営の強化
 - カスタマーサービスの充実
 - 好視聴率の実現に向けた施策の検討・実施
- ・ FIFA大会の開催 **Mission5**
 - FIFAクラブワールドカップ(2015・2016年)の運営
 - 大会開催を通じた収益確保
- ・ 新国立競技場(ナショナルスタジアム)の活用のあり方の検討

(女子サッカー)

- ・ なでしこジャパン(親善試合)の活性化

(フットサル)

- ・ 親善試合のあり方の検討と活性化施策の検討・実施

(8)マーケティング

日本サッカーは、サッカーを愛する多くの支援者により支えられています。SAMURAI BLUEやなでしこジャパンなど、多くの人々の関心を集める日本代表、また、500万人を超えるサッカーファミリーからなる豊かなサッカーシーンこそが、日本サッカーにとってのかけがえのない財産です。

JFAは、これまでと同様、より多くの方々から支援をいただき、共に日本サッカーを発展させていけるよう、日本サッカーの価値向上に努めます。

【現状の課題】

- ・各活動におけるロゴ等の標記の統一感の欠如
- ・日本代表ブランドへの高依存

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人／FIFAランキング トップ20
- ・2022年：サッカーファミリー640万人／FIFAランキング トップ10

【重点施策】

- ・ブランディングの強化 **Mission 8**
 - 日本代表ブランドのさらなる強化
 - 代表以外のJFA事業の価値向上
 - JFAの各活動の基本デザインやヴィジュアル・アイデンティティ(VI)の統一(JFAブランディング)
- ・マーケティングの強化 **Mission 8**
 - ユースディベロップメントプログラムの積極展開(日本代表以外のJFA事業の商品開発)
 - より充実したスポンサー対応と協働プログラム
 - FIFA／AFCとのFIFAワールドカップ予選等のマーケティング権利交渉の実施

(9) トップリーグ連携

その国のサッカーの普及・強化に責任を持つ協会と、その国の中心的な役割を担うトップリーグは、目指す方向性を共有し、連携と役割分担の整理を行い、協働する必要があります。国内トップリーグの盛り上がりは、サッカーを夢見る子どもたちの憧れとなり、サッカーの普及につながります。また、国内トップリーグが世界基準になることで、リーグを通じた選手の強化が期待されます。これらを意識し、JFAと国内トップリーグは、魅力あるスタジアムづくりや、クラブの活動環境の充実、各都道府県における育成面での協働など、その連携をより一層強化し、リーグの発展、さらには日本サッカーの価値向上に努めます。

【現状の課題】

- ・ JFA-Jリーグ間および都道府県協会-クラブ間の施策レベルの連携不足
- ・ Jリーグの観客数の伸び悩みと地上波放送の苦況
- ・ 日本代表クラスの選手の海外移籍による国内トップリーグの相対的な価値の低下

【リンクする目標】

- ・ 2018年：サッカーファミリー560万人／FIFAランキング トップ20
- ・ 2022年：サッカーファミリー640万人／FIFAランキング トップ10

【重点施策】

- ・ JFA/Jリーグ協働プログラム（育成プログラム）の推進 **Mission6**
 - Jリーグアカデミーの客観評価「FOOTPASS」(分析・改善・格付けシステム)の実施
 - 海外スーパーバイザーの共同招へい
 - 地域の育成担当の配置
 - 国際大会の開催（大会の創設、主催FA補助等）
 - 海外遠征の促進（選抜による遠征、クラブ支援）
 - 試合環境の改善（U-21年代の取り組み、U-16環境の充実等）
- ・ トップリーグカレンダーの策定 **Mission6**
 - FIFA / AFC / Jリーグ / 天皇杯 / リーグカップ等の年間カレンダーの検討
 - 関係団体との調整
- ・ 都道府県協会とJクラブの連携推進 **Mission6**
 - 役割分担の整理
 - 都道府県協会への働きかけ
- ・ サッカースタジアム建設の推進に関するJリーグとの協働
- ・ Jリーグとの目指す方向性の共有
- ・ FIFAクラブワールドカップ（FCWC） / AFCチャンピオンズリーグ（ACL）サポートの実施

（女子サッカー）

- ・ なでしこリーグとの連携
- ・ Jクラブとの連携による女子サッカーの普及・育成

（フットサル）

- ・ Fリーグとの連携

(10)地域/都道府県協会連携

地域/都道府県協会の活動を多面的に支援すると共に、地域/都道府県協会のあるべき姿(下記参照)に向けた組織基盤の強化、人材の養成も行います。さらには、よりグラスルーツの現場に近い地区・支部/市区郡町村協会や、これまで未着手の領域であった地域/都道府県レベルの各種連盟との連携も視野に入れ、グラスルーツのより一層の充実に努めます。

[現状の課題]

- ・地域/都道府県協会の財政の強化、組織・人材の強化
- ・地区・支部/市区郡町村協会および各種連盟のあり方の検討と連携強化
- ・各種支援制度のあり方の検討(申請・報告等の事務作業の効率化を含む)

[リンクする目標]

- ・2018年：サッカーファミリー560万人
- ・2022年：サッカーファミリー640万人

[重点施策]

- ・地域/都道府県協会の基盤強化 **Mission 8**

【地域協会】

- 地域協会の法人化推進
- 地域協会の基盤整備支援

【都道府県協会】

- 都道府県協会への支援金及び各種補助金による支援(2018年度まで現制度)
- 2019年度以降の都道府県協会への支援金及び各種補助金のあり方の検討と支援
- JFAサッカー施設整備事業等を柱とした都道府県協会への施設整備支援
- 都道府県チャートの作成とその活用

【地域/都道府県協会 共通】

- 地域/都道府県協会 事務局基盤強化研修の実施
- 地区・支部/市区郡町村協会及び各種連盟の組織機構の整理と連携強化
- 地域/都道府県協会など、各種加盟団体等との人材交流の推進

(フットサル・ビーチサッカー)

- ・都道府県協会フットサル委員会とフットサル連盟の連携強化
- ・地域協会におけるビーチサッカー連盟の発足と競技会運営

地域/都道府県協会のあるべき姿および事務局に求められる資質

1. 進むべき方向性・将来像(ビジョン)、その実現に向けたプロセスを理解すると共に、達成度について適切な評価を行える。事務局は、それらについて常に把握し、役員レベルを含め共有できる。
2. 理事会・委員会・各種連盟・事務局・市区郡町村協会といった組織機構が整備されている。ガバナンス・コンプライアンスの重要性を組織として認識・共有し、実践できる。事務局は、登録業務・事務作業・会計処理を適切に行えるスキル・知識を備えている。
3. 協会の登録料や事業収益、JFAからの補助金等に加え、マーケティング活動に伴う自主財源にて協会の事業を実施できる。事務局には、組織を管理・運営できる常勤者がおり、営業・マーケティング活動ができる人材を有している。
4. 必要情報が常にタテ・ヨコの関係者間で共有され、制度・事業の変更にも柔軟に対応できる。事務局は、外部からの情報を迅速に関係者で共有し、システムの変化にも柔軟に対応できるITリテラシーを備えている。
5. 一貫性のある普及・育成・強化体制が構築され、独自性が発揮できる環境が整備されている。事務局は、ユースダイレクター・技術委員長、各種委員長等との繋ぎ役として、大会/イベント運営・トレセン活動・施設確保・会議開催等、各事業の実施及び連携をサポートできる。
6. 各事業の適切な評価および協会のビジョンに基づき、最適な資源投下(予算配分)を行える。事務局は、各事業について、計画→実施→効果検証→改善のプロセス(PDCAサイクル)の実行をサポートできる。

(11) 基盤

日本サッカーの価値の源泉は、普及と強化です。そして、その普及と強化の取り組みを支えるのが、JFAをはじめ、地域/都道府県協会など各種加盟団体の組織基盤です。

JFAは、多くのサッカーファミリーに支えられていることを常に意識し、地域/都道府県協会など、各種加盟団体と共に、その基盤強化に努め、サッカーの統括団体としての責任を果たすべく、オープンかつ誠実な姿勢で公正を貫きます。

【現状の課題】

- ・日本サッカー界のより一層の国際化
- ・より積極的な社会との関わり創出とアプローチ
- ・社会貢献活動の充実
- ・組織基盤の強化（内部統制システム、財政、財務・会計ほか）
- ・「Jエントリー」のスムーズな導入

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人／FIFAランキング トップ20
- ・2022年：サッカーファミリー640万人／FIFAランキング トップ10

【重点施策】

- ・国際力の強化 **Mission7**
 - 戦略の立案・実行
 - 人材の派遣
 - アジア貢献
 - FIFA理事輩出
 - 国際大会・イベントの招致（右記参照）
 - ・社会貢献の充実 **Mission7**
 - JFAこころのプロジェクト
 - リスペクト・フェアプレープロジェクト
 - JFAグリーンプロジェクト・芝生化推進
 - 東日本大震災復興支援活動
 - その他、JFAのツールや普及活動に関連した社会貢献活動
 - ・社会への積極的な関わり創出とアプローチ **Mission7**
 - 国・地方自治体への働きかけの強化
 - スポーツ関係団体への働きかけと協働
 - ・企画調整機能の強化 **Mission8**
 - 企画立案の強化
 - 戦略推進の強化
 - 調整機能の強化
 - ・JFA施策の事業評価 **Mission8**
 - 事業評価のあり方の検討と実施
 - 業務管理の強化
 - ・コミュニケーションの強化 **Mission8**
 - 広報戦略の立案
 - 自社メディアの活用（印刷物、デジタル、コンシューマー対応、日本サッカーミュージアム）
 - メディアリレーションの強化
 - メディアバイイングの実施
 - クリエイティブ・制作の強化
 - イベント・キャンペーンの強化
 - リサーチ・コンシューマーインサイトの強化
 - クライシスコミュニケーションの強化
- [招致対象大会・イベント（予定）]
- ・オリンピック日本女子代表アジア最終予選（2016）
 - ・FIFAクラブワールドカップ（2019）
 - ・FIFAフットサルワールドカップ（2020）
 - ・FIFAクラブワールドカップ（2020）
 - ・FIFA総会（2021）
 - ・FIFA U-20ワールドカップ（2021）
 - ・FIFA U-20女子ワールドカップ（2022）
 - ・FIFA女子ワールドカップ（2023）

・組織改革と総務・人事の強化 **Mission8**

- 常設委員会・専門委員会・大会実施委員会・特別委員会の再編
- 事務局体制の強化(業務執行理事と事務局の裁量権限範囲の再構築等)
- 内部統制システムの整備
 - ・ガバナンス体制
 - ・コンプライアンス体制
 - ・リスクマネジメント体制
 - ・危機管理体制
- FIFA標準規約に伴うJFA規約改正と実行
- 「JFAバリュー」(価値観)と「JFAウェイ」(行動指針)の策定
- 地域/都道府県協会・Jリーグ、FIFA・UEFA・AFC・海外FAへの積極的な人材派遣・人事交流
- 人事制度の刷新、人材開発の推進
- 秘書業務(機能)の強化
- 関連会社等の新設の検討

・財務・会計機能の強化 **Mission8**

- 財政計画の作成
- 予実算管理・コスト分析機能の強化
- 新業務・会計システムの導入
- 会計処理の効率化・正確性の向上・迅速化

・法務機能の充実

- 規約改正
- ガバナンス・コンプライアンス徹底
- 法務体制整備
- 契約業務

・立法・司法対応

- 評議員会対応
- 規律委員会・裁定委員会・不服申立委員会対応

・医学関連活動の推進

- メディカルネットワークの整備と活用
- メディカル情報の発信・伝達

・登録管理の強化

- 登録管理機能の改善
- Jエントリープロジェクトの推進

・IT活用による業務改善

- 情報セキュリティーの向上
- 業務システムの改善

・JFA創立100周年記念事業の実施

- イベント・記念試合・文化事業の実施
- 記念式典(JFAアワード)の実施
- 出版物・アーカイブの制作
- JFAのメッセージ発信
- FIFA総会の招致

□ 女子サッカー

2011年、なでしこジャパンはドイツで開催されたFIFA女子ワールドカップで優勝、翌年の第30回オリンピック競技大会(2012/ロンドン)では銀メダルを獲得しました。日本の女子サッカーへの注目度は徐々に高まっています。

JFAは、2015年にカナダで行われるFIFA女子ワールドカップ終了後に「なでしこビジョン」の総括を行います。引き続き、女子サッカーを日本女性のメジャースポーツにするべく、グラスルーツの関連施策をより一層充実させ、JFAアカデミーなどを中心に、強化・育成に力を入れていきます。そして、2030年までには、選手(フットサルを含む)・指導者・審判のJFA登録者数の女性割合を10%まで高めます。

※「(1)普及推進」から「(11)基盤」までに記載した「女子サッカー」の記載内容を再掲しています。

【現状の課題】

- ・プレー環境の整備(2種・3種・4種)、受け皿の不足
- ・女子サッカーの認知度の向上、魅力の向上
- ・なでしこジャパン国際親善試合の高付加価値化(収益性の確保)
- ・指導者、審判の養成
- ・都道府県協会における女子サッカー普及の担い手の確保

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人
- ・2022年：サッカーファミリー640万人

■各大会成績目標

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
FIFAランキング(女子)	4位	→	→	→	2位	1位	→	→
FIFA女子ワールドカップ	優勝				優勝			
オリンピック競技大会(女子)		優勝				優勝		
FIFA U-20 女子ワールドカップ		優勝		優勝		優勝		優勝
FIFA U-17 女子ワールドカップ		優勝		優勝		優勝		優勝

【重点施策】

- ・女子サッカーの普及推進 【普及推進】 **Mission 1**
 - 中学生年代の受け皿の充実・拡大
 - 「JFAなでしこひろば」の促進・チーム創設支援
 - なでしこ普及コーディネーターの設置推進
- ・2種・3種・4種年代の競技会の充実とプレー環境の充実 【国内競技会】
- ・全日本高等学校女子サッカー選手権大会の価値向上 【国内競技会】
- ・女子審判員の普及推進と育成 【審判】
- ・女子指導者の養成 【指導】
- ・トレセン制度の充実 【育成】
- ・JFAアカデミー(女子)の充実と他地域展開の検討 【育成】
- ・なでしこジャパンの強化 【代表強化】 **Mission 3**
- ・なでしこジャパン(親善試合)の活性化 【国際競技会】
- ・なでしこリーグとの連携 【トップリーグ連携】
- ・Jクラブとの連携による女子サッカーの普及・育成 【トップリーグ連携】
- ・国際大会の招致 【基盤】
 - オリンピック日本女子代表アジア最終予選(2016)
 - FIFA U-20女子ワールドカップ(2022)
 - FIFA女子ワールドカップ(2023)
- ・ロードマップの策定 【共通】

なでしこ vision 世界のなでしこになる。

日本女子サッカーの発展のために、そして「JFAの理念、ビジョン、約束」を実現するために、「世界のなでしこになる。」というビジョンのもと、女子サッカーに関わるすべての人々が共有し、遂行する、3つの目標を定める。

1. サッカーを日本女子のメジャースポーツにする。
 - ・男女を問わず、サッカーを気軽に楽しめ、生涯かわり続けられる環境をつくる。
 - ・少女・女性もするスポーツ、そしてみんなから愛される・応援されるスポーツとして、女子サッカーの認知度を上げる。
 - ・近い将来、FIFA女子ワールドカップを日本で開催する。

2015年、女子のプレーヤーを300,000人にする。

2. なでしこジャパンを世界のトップクラスにする。
 - ・U-20/U-17ワールドカップに出場。ひとつでも多くの試合を経験し、メダルを目指す。
 - ・ワールドカップ/オリンピックに出場し、メダルを獲得する。

2015年、FIFA女子ワールドカップで優勝する。

3. 世界基準の「個」を育成する。
 - ・なでしこジャパンにつながる、タレントの発掘・育成システムを充実させる。
 - ・女子に携わる指導者のレベルアップを図る。

そして、「なでしこ」らしく・・・。
「なでしこ」らしい選手＝「日本女子サッカー選手」の姿、目指す姿
「なでしこ」らしさとは
ひたむき 芯が強い 明るい 礼儀正しい
「なでしこ」らしい選手になろう！「なでしこ」らしい選手を育てよう！

□ フットサル・ビーチサッカー

フットサルが、いつでも、どこでも、だれでも楽しめるスポーツとなることを目指し、その普及に努めます。フットサルは、サッカーに身近に触れる機会となるだけでなく、技術の向上手段として、サッカーに寄与してきます。また、屋内最高峰のスポーツを目指し、屋内競技スポーツとしての定着、強いフットサル日本代表の実現に、Fリーグと共に努めていきます。

ビーチサッカーについては、徐々に競技人口も増えつつあり、引き続き、国内競技会の運営体制の整備、競技会を通じた普及活動、プレー環境の整備に努めます。

※「(1)普及推進」から「(11)基盤」までに記載した「フットサル・ビーチサッカー」の記載内容を再掲しています。

【現状の課題】

- ・国内競技会の充実
- ・Fリーグの活性化、認知度の向上
- ・「J-futsal」(エンジョイ登録)のあり方
- ・都道府県協会におけるフットサル委員会と連盟の役割整理

【リンクする目標】

- ・2018年：サッカーファミリー560万人
- ・2022年：サッカーファミリー640万人

■各大会成績目標

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
FIFAフットサルワールドカップ		ベスト8				ベスト4		
FIFAビーチサッカーワールドカップ	ベスト4		ベスト4		ベスト4		ベスト4	

【重点施策】

- ・「J-futsal」(エンジョイ登録)の推進 【普及推進】
- ・「JFAエンジョイ5」のあり方検討とその他のエンジョイ大会の新設検討 【普及推進】
- ・民間フットサル施設との連携と公認化等の検討 【普及推進】
- ・学校スポーツとしてのフットサルの導入推進 【普及推進】
- ・全日本フットサル選手権大会の価値向上 【国内競技会】
- ・審判員、審判インストラクター制度の充実 【審判】
- ・フットサル指導者制度の確立 【指導者】
- ・大学フットサルの強化と組織充実 【育成】
- ・フットサル・ビーチサッカー日本代表の強化 【代表強化】 **Mission3**
- ・親善試合のあり方の検討と活性化施策の検討・実施 【国際競技会】
- ・Fリーグとの連携 【トップリーグ連携】
- ・都道府県協会フットサル委員会とフットサル連盟の連携強化 【地域/都道府県協会連携】
- ・地域協会におけるビーチサッカー連盟の発足と競技会運営 【地域/都道府県協会連携】※ビーチ
- ・FIFAフットサルワールドカップ(2020)の招致 【基盤】

JFA登録者数の増加目標

「JFA中期計画2015-2022」では、「JFAの目標2030」に合わせて、サッカーファミリーの増加目標として、「普及目標2018」と「普及目標2022」を設定しました。

このほか、JFAにとっての重要な普及指標である選手・指導者・審判の登録者数の増加目標を、下記の通り、設定しました。

	2014年度	2018年度	2022年度	2030年度	2050年度
■選手	2,798,503	3,200,000	3,500,000	4,000,000	5,000,000
[登録選手]			(増加率)		
1種	154,876	160,000	3.3%		
2種	173,843	180,000	3.5%		
3種	268,518	290,000	8.0%		
4種	315,178	350,000	11.0%		
シニア	24,935	40,000	60.4%		
女子	26,978	30,000	11.2%		
フットサル	44,057	60,000	36.2%		
J-futsal	21,114	300,000	1320.9%		
(小計)	1,029,499	1,410,000	37.0%		
[未登録選手] ※1	1,769,004	1,790,000	1.2%		
■指導者	150,213	160,000	175,000	200,000	250,000
[登録指導者]			(増加率)		
S級	411	500	21.7%		
A級	1,363	1,700	24.7%		
B級	4,006	5,000	24.8%		
C級	28,701	31,000	8.0%		
D級	42,055	50,000	18.9%		
監督数	12,411	12,000	-3.3%		
キッズリーダー(任意登録)	972	1,200	23.5%		
(小計)	89,919	101,400	12.8%		
[その他の指導者]	60,294	58,600	-2.8%		
■審判	278,028	320,000	350,000	400,000	500,000
[審判員(サッカー)]			(増加率)		
1級	185	200	8.1%		
女子1級	41	50	22.0%		
2級	3,400	3,600	5.9%		
3級(一般)	32,865	35,000	6.5%		
3級(U-18)	554	800	44.4%		
3級(U-15)	34	500	1370.6%		
4級(一般)	139,319	146,760	5.3%		
4級(U-18)	50,305	70,000	39.2%		
4級(U-15)	24,199	35,000	44.6%		
(小計)	250,902	291,910	16.3%		
[審判員(フットサル)]					
1級	51	70	37.3%		
2級	894	910	1.8%		
3級(一般)	3,803	3,880	2.0%		
3級(U-18)	18	30	66.7%		
3級(U-15)	1				
4級(一般)	18,466	18,600	0.7%		
4級(U-18)	699	820	17.3%		
4級(U-15)	394	470	19.3%		
(小計)	24,326	24,780	1.9%		
[インストラクター]					
サッカー審判インストラクター	2,324	2,800	20.5%		
フットサル審判インストラクター	476	510	7.1%		
■運営スタッフ	54,753	60,000	75,000	100,000	150,000
■サポーター※2	1,980,723	1,860,000	2,300,000	3,300,000	4,100,000
■合計	5,262,220	5,600,000	6,400,000	8,000,000	10,000,000

※1：未登録選手の一部は、2014年度運用開始のJ-futsalに流れる見込み。

※2：サポーターは、新たなメンバーシップ制度の導入により、今後は、直接JFAと何らかの関わりを持つサポーターを増やしていく。

6. 収支計画

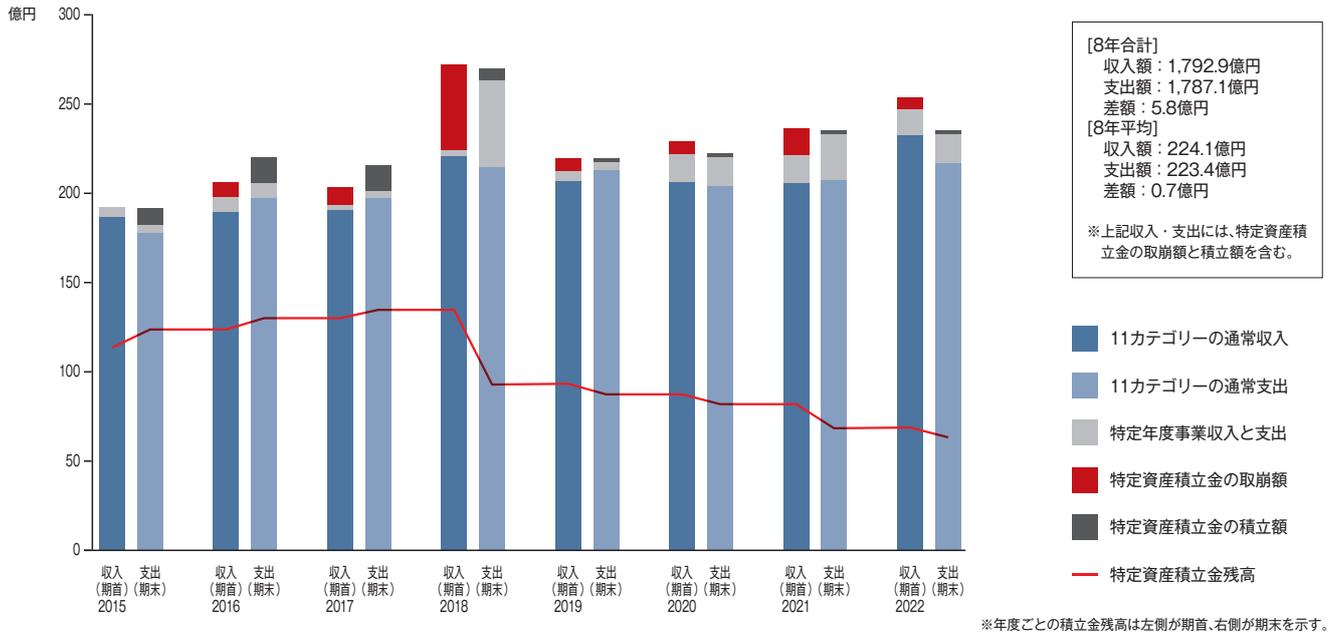
「JFA中期計画2015-2022」では、計画期間の8年間の収支計画を策定しています。特に、この8年間には、JFAナショナルフットボールセンター(仮称)の整備やJFA創立100周年記念事業など、特定年度に大きな支出を伴う事業が予定されています。このように、年度ごとの事業・施策の中期計画を策定し、その収入・支出の計画(見込み)を立てることで、JFA事業全体に大きな影響がないようにしてはなりません。なお、この収支計画はあくまで参考にすべき指標の位置づけであり、正式には、年度ごとにJFA理事会の議を経て、予算を策定します。



収支計画2015-2022

本中期計画に基づくJFAの収支計画は、下記の通りです。なお、この収支計画はあくまで参考にすべき指標とし、基本的には、年度ごとに、削減が必要な事業、拡大が必要な事業、新規で取り組むべき事業等を見極めながら、JFA理事会の議を経て、予算を策定します。同時に、本収支計画については、年度ごとの実績額との比較も行います。それにより、本中期計画の期中に実態と合わなくなる可能性もありますので、その場合は、都度、収支計画を更新していくものとします。

なお、現段階での8年間の事業規模は、8年間合計で約1,793億円、年平均では約224億円となっています。



[収支計画グラフについて]

- ・上記のグラフは、「アクションプラン2022」の11カテゴリーの合計収支を、通常事業の収支とFIFA大会の開催やJFAナショナルフットボールセンター（仮称）整備等の特定年度に発生する収支とで分けたものに、特定資産積立金の取崩し・積立・残額（折れ線グラフ）を加えてグラフ化したものである。
- ・特定資産積立金は、「退職給付引当特定預金」、「国際競技引当特定預金」、「遠征競技引当特定預金」、「高校選手権引当特定預金」、「交付金引当特定預金」、「JFAハウス修繕引当特定預金」、「フットボールセンター整備助成引当特定預金」、「JFAアクションプラン引当特定預金」、「JFAサッカー施設整備助成引当特定預金」、「100周年記念事業引当特定預金」(3種類)、「JFAフットボールセンター建設引当特定預金」の計11種類があり、2014年度末に合計112.8億円の積立金となっており、2022年度末には63億円となる見込み。
- ・国際大会の招致が実現した場合の予算は、現段階では、収支均衡を想定している。
- ・JFAナショナルフットボールセンター（仮称）への積立は40億円とし、積立金の40億円に加え、整備当該年度（2018年度）に5億円を計上している。
- ・JFAサッカー施設整備助成事業のため、2016年から2018年までの3年間に各5億円（計15億円）を積み立てる。
- ・JFAハウスの大規模修繕は、本計画時においては、8年間に織り込んでいないが、年間1億円の修繕費の積み立ては行う。
- ・年度ごとの予算策定にあたっては、支出全体の5%を政策費として、特に当該年度に重点投資が必要な活動に充当するための予算を確保する。但し、その5%相当の予算は、上記収支計画には計上していないため、年度ごとの予算策定の中で捻出するものとする。
- ・本計画では、8年間の合計において収入が5.8億円上回るよう収支計画を策定した。一方、単年度では支出超過の年度もあるため、年度ごとの予算策定にあたっては、都度、予算策定時に検討・調整を行うものとする。

[「アクションプラン2022」項目別（11事業構造別）の収支規模（8年平均額）]

代表強化			マーケティング			国際競技会		
収入	支出	差額	収入	支出	差額	収入	支出	差額
9.8	29.9	-20.1	96.4	14.6	81.8	37.8	27.3	10.5
審判			育成			指導者		
収入	支出	差額	収入	支出	差額	収入	支出	差額
7.7	7.7	-0.1	3.3	13.4	-10.1	5.4	5.7	-0.4
普及推進			国内競技会					
収入	支出	差額	収入	支出	差額			
14.5	23.9	-9.4	31.1	26.7	4.4			
トップリーグ連携			地域/都道府県協会連携					
収入	支出	差額	収入	支出	差額			
5.3	5.3	-0.0	0.0	18.7	-18.7			
基盤								
収入	支出	差額						
12.9	50.1	-37.2						

※表内の金額は四捨五入した金額で表記されており、「収入」欄と「支出」欄の差と、「差額」欄に記載の金額は、必ずしも一致しないことがある。

JFA中期計画2015-2022

発行日 2015年5月14日

発行元 公益財団法人 日本サッカー協会

〒113-0033 東京都文京区サッカー通り(本郷3-10-15) JFAハウス

TEL 03-3830-2004(代表) FAX 03-3830-2005

URL <http://www.jfa.jp>

写真提供 Jリーグフォト株式会社、エルグランツ株式会社

※内容、写真等の無断複写・複製・転載を禁じます。



公益財団法人 日本サッカー協会

JFA.jp